四季部類

俳諧歳時記新撰草

春

春

中

初一

祝

祭

明治十四年癸未

如意山人敬

百錬

版權所有
京都書肆
風月堂

芭蕉翁十哥

夕立や田を二つ国の神しあらハ　其角

痩る身を
さすらへて
ゆくすゑ
秋の風　尭雪

灌仏や
めてたさ
一寸にさかり　支考

都へ
帰雁
僧士の子孫

本箱さまの川あるる
桐の葉
繁る夏　許六

雪ふる
首のうへを
嘶　移竹　丈草

越ふるも
あるる
藁の影　吉春

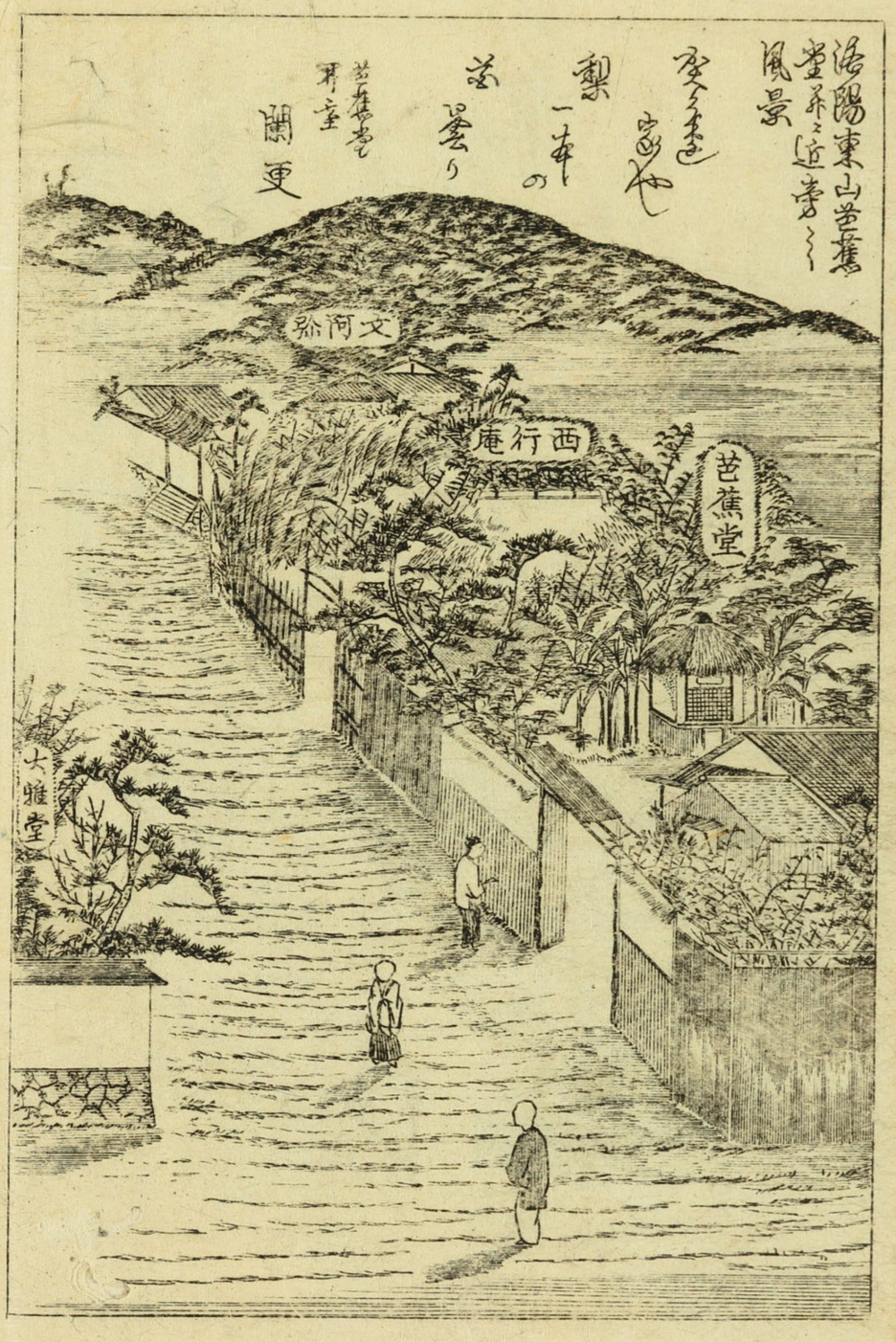
杉苔さ
人まつ
の
ゆくすゑ　聖坡

砂鐘の
ゆきも
暑し　友汁

月　此枝

野鹿
その
日の
影　杉風

余の
ゆきも
編笠
冬の
柳葉　越人



凡例

此編ハ四時ニ部類ヲ分チ月毎ニいろはノ文字ニ其季題ノ頭音ヲ引此ニ注釋シ以テ專ラ席上ノ便トス

但ノ○ろくがつ、かくがつ、又ハ十ろくがつ、せちがつ、又ハ十ぐがつ、しちがつ、ぐがつ、へちがつ、ぐがつ、ぐがつの數社假名ばかりを惑ふ正して都をもつて時を都て初學の惑なるものハ先ろくがつ等の字ハ一ぐがつ、かくがつ、の數を㊁の部せちがつハ㊂ぐがつハ㊃ぐがつの部に分せ出ます文字の事も見ニ準も看官詳密まへし

公事故事及節會禮式神佛祭典等ハ陽曆改正ノ後大ニ豹變アリト雖モ舊來ノ侭ニ出ス且別ニ新旧季節ノ差違又ハ諸國ノ神祭ヲ新暦ヨリ抄出ス

但中●印を加ふるものハ俗ニ廣まるもの或ハ名筆ある類書を引て所ならざるものハ書數を省り抄出ス

頭義標目

四季部類

月毎に乾坤森羅万象神祇衣食等の部を分ち新しく圖を作り此に齊合まるの古今名家の句を掲ぐ初下より二の巻に亦つゞく七十八丁

見日拾遺 七十九丁　一巻之式 賦物 同丁　和漢之事 八十丁
万句千句十百韻 八十二丁　百韻之式 同丁　米字之式 同丁
七十二候之式 同丁　易之式 同丁　源氏之式 八十二丁
五十韻之式 同丁　四十四之式 同丁　歌仙之式 同丁
長歌行之式 同丁　短歌行之式 同丁　十八公之式 同丁
首尾之式 八十三丁　表合之式 同丁　發句服部三之事 八十三四丁
四句目之事 同丁　月花の定座 八十五丁　去嫌大意 同丁
句数并去嫌 八十六丁　季節之跨物 八十八丁　嫌古式八ヶ條 八十九丁
指合之事 九十三丁　正花之事 九十七丁　戀之詞 九十九丁

切字之事 百七丁　発句之格 百十三丁　押字抱字之格 百十九丁
執筆法式 同丁　附合之事 百十八丁　七名八体之事 同丁
叢句綴附之事 百廿丁　附ル事 百廿四丁
文字留部三之事 百廿六丁　巻中連綿之事 同丁
名所地名違附之事 百廿五丁　畳詰之事 同丁
和歌諸風体 百廿六丁　短哥 同丁　旋頭哥 同丁
混本哥 百廿七丁　廻文 同丁　俳諧 同丁　折句 百廿八丁
折句沓冠 同丁　物名 同丁　贈答 同丁　蕉翁古池之句 百廿九丁
同遺稿 百四十一丁　名所地名 かな字 数部分　二字之部 百四十七丁
三字之部 百四十九丁　四字之部 百五十四丁　五字之部 百五十八丁
年賀之称 百六十二丁　追善年忌之称 同丁
俳諧七部集 自百六十三丁 至二百廿四丁

附録

俳諧之字義
俳諧連歌之権輿 并ニ俳諧風体之詩
俳諧之大意

標目終

俳諧歳時記新撰草 巻之

京都 山口素堂編輯

明治新版

四季部類

一月之部

歳旦之詞

元旦　元朝。元日　鶏旦。改旦　歯朔。歯首　上旦。正朝　歯節。玉節　歯端。玉元　初空　初鶏　初鳥　初明　初日の初　初夢　初霞　初烏　降

俳諧歳時記新撰草

一月

(い) 院拝礼 [大府記] 延久五年正月元日辛巳、院拝礼、午刻諸卿以下参集、次ニ畫御座庇御簾、五ケ間次御出、直御装束、次関白前太政大臣、右大臣、并大納言、中納言、参議以上一列庭中ニ次殿上四位以下、別当判官代等一列、拝舞了之後、従上鶏次第退 略記

巖嶋 [図] 幣中社多神ハ市杵島姫命ハ藝の国伊都郡ニ有り毎年正月下の亥日神楽行

祭 下の亥

寝積 寝ノ稲ト和訓同じき故ニ祝詞ニ寝ノ稲ヲ又稲の穂積ニ [雑談抄] ニ寝

寝擧 [外ニ書の如く唱ヘて病疫あるとき] 寝ノ稲ヲ和訓同じき故ニ祝詞ニ寝ノ稲ヲ又稲の穂積ニ

芋頭 芋かしらを

井竹記　つゝ井　井筒

若水　初子の日

四方拝　朝拝

朝賀。小朝拝　奏瑞。奏賀

氷の様　七曜の暦

国栖奏　国栖人。国栖笛

院の拝礼　年礼

門叟　年の初

[illegible]　年立

[illegible]立くる　[illegible]玉の年

新玉の月　年臥

改年　明る年

[illegible]ハ例の祝語なり玄蕃頭・主殿頭までの[illegible]を[illegible]

磯菜摘　磯辺の菜　八重垣

飯噉　和漢三才図会に云かるもの元五六寸[illegible]頭鶏の卵のごとく[illegible]中に白肉備つ煮て食[illegible]粘蓮なる飯のごし故に飯と名つく旧正月[illegible]

凝かへる　字彙に凝氷堅也○[illegible]氷の再び結び[illegible]意を[illegible]

居籠　九日　夷祭　十日　[illegible]神社の祭也

村氏[illegible]　[illegible]　[illegible]　

梅かしら　ちまき　酒　粉牛

仔牛　仔牛　門松　注連縄　門松　注連縄　餅　菓　掛け子　親子餅　餅　菓　餅　菓

大かがみ　つるし柿　餅かがり　花餅　松のうち　つるし柿　松　竹　松　竹の作り　福ちら　楪　葉　蓮　葉　ちら白　徳　俵　田作　ごまめ

[歳事] 元初夢　大三十日の夜より元日の暁に至るまで　[雑談抄] 元暦を賞ス　改年初て見

初鶏　同上　初夢　初暦　暦開　歯固　餅　[世諺問答] 歯固

[和漢三才圖會] 拾遺　天王寺の民家　河内の上野米の穀を用いて　[世諺問答] 蛍光の眼の瞳を接く　[世諺問答] 玄雅子　[扶桑畧記] 宇多天皇寛平八年　[菅家文章] 予亦嘗聞于故老曰上陽子日遊厭雲林院　[捨荑抄] 二月子日　[世諺問答] 玄雅子　[世諺問答] 玄雅子　[世諺問答] 玄雅子

初子の日　初子の日　初子の日　

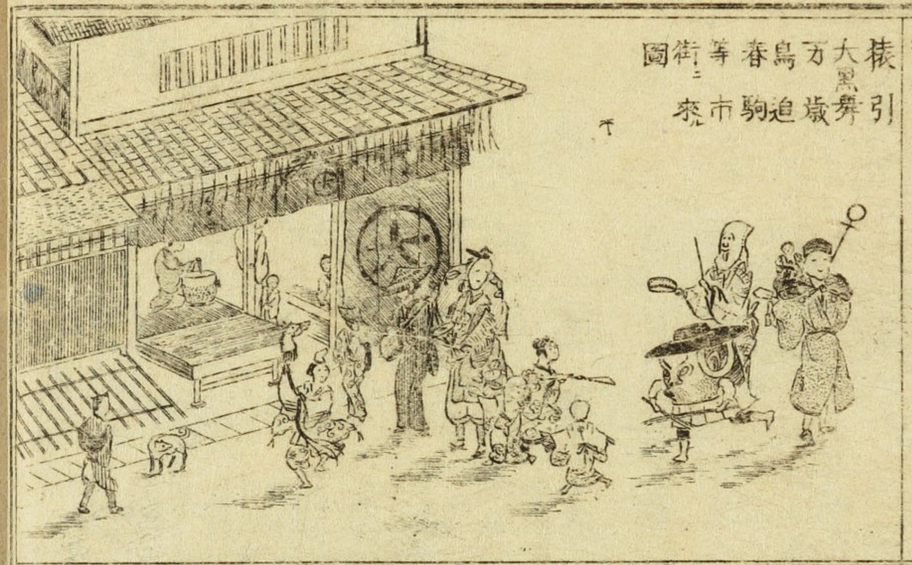
初　初買　初荷　浴室初　書初　書試筆　筆始め　初日の出　初夢　初鞴つく　鞴始　三物連歌　幸木　福寿草　庭竈　○旧正月　歳旦之詞

子の日遊之圖

初子の玉箒　袖中抄　玉箒とも蓍とも草とも子の日の小松を引ぎして箒とす　初寅　紀事　正月初寅の日　初子　造酒司家正月子の日に蚕飼始る事なり　初卯　正月初卯の日稲荷の社に詣る事なり

立春　春立つ　明の春　唐代の春　君の春　子代の春　子の春　四方の春　宿の春　三の春　三のすゑ　若夷　歳徳　歳徳方　門の神祠　星をまつる　佛　懸想文　歳大黒　辛櫛　戸　戸祝　鳥追　打　初天神　初子　初寅　春楽　春　北日正月　初演劇

初天神　北八日は天神　北八日は天神の會　初子　初寅　北日正月　初演劇



猿引 大黒舞 方壺 烏帽子 追駒 春駒 等 市街 圖

男女ともに直衣ひ男舞人ともに芝居のもの芝居ハ今年もしめく演劇奥行ものを云

○本義ハ上の圖を寫し古今名家ものを掲載を

元禄時代ものを

遊女 吉原 伊勢の はつ便 芭蕉

元日や 七草 雪の 物かなり 嵐雪

年もまたに ひく 遊女の 晴着 仝

丁保ものを時代ものを

天の戸 ハ 神代 ものを 初日 新 軍 元

法華 人 ひ 海 晩 春 駒 春 村

七草 粥 の 細 の 片 ま 月 梅 宝

餅 七 社 神 く 作 き 久 季 飴 の 玉

ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま

ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま

明治ものを来ものを 大祓

乃治ハ年太陽暦改ものを

年 ま 人 ま 人 ま 人

左義長 爆竹之圖

雪ん ど 吉出吉

網引 北日正月 店卸 帳書 雲一永 春寒

也蛾入 正月 牡綴 偶偶師 余寒

ひ 女叙位

日本紀 持統天皇五年春正月癸酉朔 賜内親王女王内命婦等位

云々 長治 公事根源 長ハ女房の位階を叙せらるゝ儀なり 陽成 おこなはるゝ

二宮大饗

公事根源 正月二日王卿以下二宮に参りて拝礼ありて饗あり 二宮とは東宮中宮の御事歟

庭竈

紀事 ふなばを竈上に垂て家内動乱の為に竈を造り釜を据て焼て用ひ竈を竈と云 世間的筭用 元禄五年印本

善四郎 良中の家に竈を造り釜を据て焼 善四郎 軟物 居長の家内具那 僕婢の為にもなく不

ほ 蓬莱

餅の具 四季彩色 列子 渤海東有山一曰岱輿二曰

貞嶋三曰方壺四曰瀛州五曰蓬莱華実皆有滋味食之不老不死所居人皆仙聖之種云々 蓬莱盤

断の居 入る 丸餅を焼 餅を

喝者

時鮮日記 形ち幅 餅 蒸 酒 糟 盛て 巻 盛

星佛

滑稽雑談 歳年の星の九曜を年の初に祭る

蓬莱之図

題蓬莱

穂俵

莫鳴菜。 宋朝式 奈々里曽神

寶引

福引。

雑談抄 餅の異名を福と云 故に餅を福と云 古く 福引 餅を二人して引 引 福引 宝引 福と云

兼三春物

菠薐菜

四月蓋を起し

徳長 ㊋ 歯茎の邪を治

冴かへる 凍ゆる 凍 氷解 解

残る秋 去年の秋

残雪 雪の名 雪解

雪解水 雪乗 雪なだれ 雪き汁

ゆき消る雪 雪 雪解

霞

雪の衣 雪の網

名残の雪

八重雪 つもる雪

かすみ網

鐘かすむ 霞

長閑 糸遊 陽炎

暖　水ぬるむ

永日　遅き日

春色　佐保姫

東風　春風

木地物縁　春雨

春雨　遅き色

芽春　春雪

霞　梅雨

梅枝　大雪

植物類

子日の松　小松引

又ぢるまり蓋ゝ紙きて
こなかく紅色のなりやうに五月
極めて口をやらこ後室をもぶ

防風　和漢三才圖會 子嫩き時能味噌に和して食

歳徳神　恵方棚。

紀事 陰陽家来年の支干に因て四方の間吉凶を考へ
もまを得方に移す　簡篋閑傳 歳徳神八頭梨女房
得八將神の　**桃符**　桃板。桃梗。神荼　鬱壘。　淮南子 羿、桃梗を死せ
毋まを去る
許慎の注云、梗、大枝也桃を以て人を作る以て羿を打
殺せしを以て鬼魅を畏る今の人桃の梗を
杖を作り蓋且て門へ掛く鬼を辟る是ゝ
六帖 元日桃符をつくり戸に着く札を仙木とす
百鬼のおそれ
ほのるめくる
云二の神ゆる神荼鬱壘云ふ鬼出入執て以て虎に
綱ふとして蓋帝はく是を象て桃板を門戸の上に立つ

年立かへる　年の再ひかへる来ると云ふ義なり　**年男**　新年の変
事を奏る人を云ふ

鳥追　雍州府志 元旦の人元日より十五日まで笠を着自巾を以て

七種　薺　仏の座　せりな

芹　菜　すずな

すずしろ　若菜　すずしろの若菜

磯菜　磯菜摘

水入菜　水入菜

子代の菜　志ぶつむ

根白草　せり

らめ菜　嫁ぬすび

むけ髪摘　菁　菜

下　蒲　蓼　蓼

蘿　はこべ　箒つけれ

土　筆

けし若菜

四季作諸職時記竹取草

面を覆ひ鬼を追ふ紀に祝詞を唱へ門に立て米粥を
食ふ是を誠の子二神と云ふ又云ふ追儺
四季の事を辞ふるものあり

野老　和漢三才圖会 蔓葉頗る薯蕷に似て小白花
ふ類也俗野老とし鰒を以て海老とし
注食物　**年玉**　新年の賜を云　（さんど　左義長の条出
て充つ　十二月の花　梅の郷に作出す）

ち

朝拝　朝賀。奏賀。奏瑞。小朝拝　公事根源 元日
辰の時　天皇
大極殿に出御の儀に行る群臣礼服着用
奏賀奏瑞云去年の日出度奏瑞の事
中上れる事を記し今日奏する儀を小朝拝と
只臣下の元日の事　天子を拝し奉る事也中
礼行る　延喜式 左大臣以下五位以上参
内同十九条又元の儀に行り也
礼行る

朝覲行幸　公事根源 天子年の始に上皇并母
后の宮に行幸ある事也

蕗の薹 ふきの花 ちつ草

若草 ちつ草 新草

古草 草 苔

野大根 草のつかさ とうなる草

木の芽

梅 白梅 やま梅

野梅 との花 花の兄

好文木 梅まゆみ 学士梅 蘭 麝

裏苦菜 白菜 苦菜見草

松乃花 千くへりの花

若まつ 及まつり立 若 麥

種けし免 畑 打

畑くれ 田をかへす

大同四年八月朝覲の儀始る 嵯峨天皇 仁明帝の母后と朝覲のため伊勢に行幸 時の意 子代の春 子代の初春、又百世 代 古歌 帳綴 紀事 四月四日諸蕃人 帳書。 簿冊を裁縫 修書 の意

(り) 履端 左傳 先王之正時也履端于始 正於中 歸餘於終 元日を云

両の物 小豆 豆 開牛蒡 の両種を古器に盛 盛物 又料の物 料 客 はけ 盛物見草

臨時客 年中行事歌合 正月二日臨時客 臨時客 客 大方 大臣 以下の上達部を招て 饗 饗 饗

猫の戀　書写猫 猫と恋する事

白魚　魚氷に上る

懶魚を乾　百子鳥

鶯　夷岩の絶まに鳥

金衣鳥　春花の

鸞　雪の中の琴引鳥

雲雀　雪夜の琴ひく笛

鴛鴦　多くつる

鶉　鳥さわぎ

蛤　蜆

何事も

衣食類

七種の粥 薺かゆ

福沸　鏡開

臭足鏡割　節振舞

小豆粥　町汁

鶴の庖丁　廿日園子

蕗　蕨　干大根

干芸　子日衣

鶴之庖丁

四季非諧歳時記新草

井ハ陰生ノ水ノ方ハ井ニ蓋ヲシテ立ル事ニアレバ井ノ方ハ開ク云

若菜 初若菜。

公事根源 内 藏寮并内膳司ニ正月上子日ニ若菜ヲ献ル七種ノ若菜ヲ供ス七ツノ若菜ヲ云七ツ七草ノ若菜ヲ食ス云 延喜十一年正月七日ノ後院ニ七種ノ若菜ヲ献ル 寛平年中ノ事 延喜十一年正月七日ノ後 巻軸ニ載ル歌ハ一ツ云 近世絶テ事ナシ 夫四ツハ偶偶ノ象ニ出

若餅 小餅ト云ハ小ノ字ヲ忘レテ若ヲ云 又一説歳旦ニ搗ヲ若餅ト云

若草 新草。之種ニ春初草。草初生ヲ云

若緑 本草 松二三月鍼抽ンテ花ヲ生ス長四五寸法黄緑ヲ云ヲ鍼正月一二寸ヲ云 法緑柳緑ヲ色ヲ云黄ノ間色ヲ云

若夷 夷廻し。紀事 京師の街

三春物 山葵 大和本草 加茂葵ニ似ク其ハ姜ノ形ヲ山中水ニ近キ石ニ多ク何ノ人家ニモ是ヲ移シ植ル云 七月種ヲ下ス細ク黄白ニ咲キ子ヲ結ス

か 門の神棚 季吟曰在家の家戸ニ棚ヲ設ケ神ヲ祭ル夜ハ燈ヲ点シ供ヲ上ル云々 俗ニ云 衣数神歌

何事も

曲の絶まに蕃羊アラレバシリと云 殿上地下の四位以下の輩ヲ云 殿上人ノ袖ヲ

西宮記 古語ニアラレバシリと云 祝言を必ずもうしに納ル

歌 公事根源 男女声ヲ合テ歌ヲ謡ヒ舞ヲ舞ヒ

女節分 疫神祭ヲ云 ⓢ 吉田法師の事

薺蒿摘 和名抄 薺菜一名蕣蒿 和名於八木 翠禽食經 状ち芥草ニ似ク香ヲ

夫木 ケフハ中ル雪ノ白ノ紀ノ美ヲ

河海抄 袖ヲ人ノ袖ノ遣花ヲ以テ冠ノ顕縁ノ

細流抄 ヲ人ノ袖ノ人ノ袖ノ人ノ袖ノ

女踏 男踏歌 女踏

わ 若小井 閑。井書ル。

公事根源 正月ノ内裏ノ中ノ裏立日ニ是ヲ若ヲ若ヲ云 裏中ノ事ヲ若ヲ云 出 文書 ○包

柳　衣　梅　芸　衣
干　鱈　酢　蛤
書　ぬ　ゝ　赤　の　芽　漬
山　椒　皮　鹿　尾
海　雲　若　和　布
海　苔

[illegible]

[illegible]

[illegible]

奥津海苔

神釈

祇園削掛　昆沙門功徳経
船玉祭　天狗宴

[illegible]日國所ハ下ニ委ク法シアレバ略之

箕　面　富　玉　巻　ハコサキ
饗　か　へ　住　吉　初　卯
菜　摘　川　神　支　御　齊　會
御　修　法　大　元　師　法
嚴　島　祭　厄　籠
十　日　蛭　子　住　吉　御　弓
子　歩　御　粥　三　保　瑟
常　陸　帯　越　後　札　切
猶　子　神　支　御　忌
吉　田　清　稜　女　節　分
厄　神　祭　蘇　民　將　來
初　寅　奮　おろし

門の禮帳

[明世說新語]京師節日壬人皆出賀惟置白紙并筆硯于扎賀客至記其名字亦邦俗五節供皆以賀客為[illegible]

懸鯛

[紀事]元日ニ小朝一双を藁縄にて

数の子

[本草]鯡の子なり正字鰊鯡月歳始及び婚家以て規祝の者とす子の義を取

搗栗

[和漢三才圖會]搗乃訓を勝とかく後搗頃の刻祝し用也

飾海老

紅鰕俗呼鰕と云或は蒲倉鰕と称し賀祝乃

飾蕨

[本草綱目]白炭除夜立之戸内亦辟邪氣云々の義なり

注連飾

[世諺問答]ちめ縄ともいふ左縄よりて縄のはしを捲くぬきの部を左ハ清浄なれバ[illegible]ぬハすを[illegible]ぬハすを[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ

繪踏

公事故事 二宮大饗

或ハ柳樣花ノ如キ物ヲ紙ニ切リ粘シテ松烟ニ
樣ヲ形ヲ畫ヲ畫ク色ハ白ク畫ク
樣ヲ入ル毛ヲ合ハケテ用ル祝樣ト云新婦ノ家
毎ニ入ル射婦ノ腦ヲ男子ヲ產ム樣ト兒
乃戴キ物アリ瑞相ト云ヒ餅ヲ入レ
ホヒ加ヘ餅ヲ入レ

瀨魚ヲ祭

礼月令 孟春月瀨祭魚 **埤雅** 瀨取鯉於水齋 **四方陳之進而弗食也謂之祭魚蓋祭其先** ● かすみを乃
和名抄 唐韵云霞ハ赤氣雲也
芭蕉

兼三春物

霞 カスミ

如邦ノ云ハ漢土ノ靄ノ字ニ
● 霞の網 **内傘** 水色ノ如ク霞ノ網ノ似
● 霞の海 水色ノ如ク霞ノ海 **雜物** ● 霞
古今 霞のきぬか
● 霞の袖 霞の衣の
● 霞の波 霞の海の緣語ヲ浮べし
● 霞の命 仙人ノ霞ヲ食シテ命ヲ延ルモノ

流霞 ● 霞の酒 **抱朴子** 到天上仙人以流霞一盃飲之 **書言故事** 天仙酒名

元始祭 臨時客 朝覲叙位 女叙位 參 女王祿 白馬節會 御歌會 御弓 外記政初 縣召 御新 踏哥 男踏哥 女踏哥 内宴 殿灰飛 春盤生菜 桃符 桃板 仙木 神荼鬱壘 天穿

霞ヲ洞 カスミ ホラ

真洞詩 萬里洞中朝玉帝九光霞内宿仙壇 **内傘** 仙境ヲ又院ノ内所ヲ申シ

契沖曰霞の浮ぶ如しと霞を云ふ
真風の袖と ふる雪の花は春と

霞の浮ぶし

鐘 カネ

霞の汁とかすを鐘聲

陽炎 カゲロウ

雙鑑輪 陽炎ノ多ク遊ブ物 二名也 霞ノ事ヲ陽炎ト云ヒ

鏡草 大内ノ鏡ノ上ニ置ク草根

春 ハル

一月 公事故事 二月 乾坤 一月 かよた

霞の年 ヨヒ 去年ノ年ト云ヒ

よ四方乃 ヨモ

鏡餅 四 **鏡屏** 七 **齒固の歌** 鏡屏ノ歌

具足綾開 門乘、川乘、風見草、柳の糸ノ出る

十一

孝明天皇祭

○二月之部

乾坤

二日灸

朧月 おぼろ新月 春

初稲光 初雷 出出〳〵雷

芝居二の舞り 出代

社日 社祭の雨

風 風の吹たがる風

植物類

初花 花待

雛花 初櫻

吉田清綏 紀事 正月十九日大綏の年夜入る 吉田ト部家新年の行事なり

齋場結の前に八所壇を構へ八方を拝せる甚後齋場所の八角社内に入る宗源神道の行法を修せらるる也を大綏と云又皆を女節分と云節分丑日祭りして備さる女もの今日詣るをそなへ

藁蒿 野園家園と分川とを目ひぞして叢生せる草なり 春の初生の芽を摘み食す 目メガハギ

同物なり（オハギ）に似たる一種別なり

九 寶舩數 大三十日夕元日なるの

夢又は絵初夢とて宝船の下へ寶舩に七福神の乗りし画を敷寝して延命を願ふ今俗二日の夜也

大黒舞 寶舩を曳き廻る者なり 正月元禄

寶舩の図より遠ざかり後の方に大黒の舞を演じ其の面貌武夫の門を叩く事あり

橘 和名抄 橘の小者也 和名安倍太知波奈

太知波奈の和名は橘樹の名なり今世人之を橘と称するものは乃ち色橘なり橘は十有四種有り 月令廣義 正月初二日、賜橘於群臣、則古今以橘為嘉祝之果

橙 和名抄 橙似柚而小者也 和名安倍太知波奈

和漢三才圖會 正月小内花を付く凡八年を歴て実を結ぶ霜後黄熟す辛苦くして食べがたし 表白黒く裏赤く色濃く久き耐て夏に至る後代くと云へども不敬なるが如の果をするなり

俵子 糸切歯 俵子は五万米軽し

武家の祝儀用作は農家に祝儀俵子を商家の祝儀と云て又商家を海苔を俗に俵子と云金海苔と云又奥州金花山の海苔を産するを原。乾鮭なり田の蘭と云て田つくりの名なり

店卸 商家歳年中之金銀出納及品物賣買計算利益又は益く高値を付くるを云

大元師法 公事根源

法部省にて七日是を行ふ藏人内蔵寮の官人を法師衣を給ひ壇所に入る御の下に衣箱に入れ

蓮根掘 蓮根 蓮の実 蓮の花 蓮の葉 蓮の茎 蓮の実 蓮の花 蓮の葉 蓮の茎 蓮の実 蓮の花 蓮の葉 蓮の茎

生類

雛子 乙子 ヒヨコ 孵子

鶏 佳だあの巣

鶏子 行鶏 去鶏

鶏 鶏の別 鶏の子

鳳 鳳凰

貝鳥 鳥

山鳥 山鳥の子

はた鳥 鳥

松虫 虫の名

孕雀 雀

雀子 親雀の子

雀の巣 雀の巣

引鶴 人日。

引鴨 旧俗に正月七日を五節句の初とし七種粥を羹をこしらへ吉義也 東方朝占書 正月一日を人日と云 ● 人を帳に貼る 荆楚歳時記

鳥の巣 多の旧巣

多の旧巣 人日採を蓼を人を作り屏風の上に貼し之を立て故に菜摘川の神事と云

朝鷹 白尾の鷹

白尾の鷹 佐保姫の書 猫。 雑談抄 此着陰獣なり結を陽者本犯さるを交合を好む是を猫恋と云

継尾の鷹 佐保姫の書 子日衣 何れも子の日始て着用の衣を云 子日始は図 初子の日出

な

菜摘川神事 神社啓蒙 勝手明神の社 大和国吉野川の辺

内宴 公事根源 内宴とは内裏くの節

七日正月 七種粥 行る文人共も仁寿殿に行る文を作り御前に講ずる云 人日。

七草 薺打。正月七日七種の菜を食べし七種とは松、蘿蔔、芹、薺、荒鞠、蘩蔞、

伯鷹 伯符 鈴鹿山 鳴多符

鷹化して鳩と成る 蛙

蟇 青蛙

蛙子 蚪

蜂 似我蜂

蜂の巣 蝶 揚羽の蝶 蛇の穴出る 石龍出る

地虫穴を出る 田螺

蚯蚓 地中の貝 まてがら まてがい

馬刀

佛座、七種の異名 世説改車苑 七種の菜を煮つと正月七日の夕べ鬼車鳥流る家門を打て灯潘を消し てこれを去れと和俗七種を打て云 唐土の名ぶ日 本の古地へ流る如きに此鬼車を忌むこと紙なり 板をうつは鬼車鳥の出るを防ぐ 太平廣記 鵠鶻は即鵠なり一名姑獲一名乳母 又は鬼車 と名つく 表皮の文彩陰時に遇へは暗を生鎖ずして 過ぐ尤多し 人家に入り人の魂魄を攫を或を云 常に血を滴らす家は凶殺あり

う

裏白連歌 雍州府志 北野社に正月四日裏白連歌あり 凡連歌懐紙四枚なり 中古筆にて片面を捻しこれを記す是なり 流例となり故に一枚を又五枚を重ね 公事根源 御杖 天持統天皇正月卯の日大学寮 これを奏る 日本紀 又仁寿二年正月 佐保姫の書 世卯杖と加茂より民家へおくるは一尺余りの木 を白く 三光院 卯杖 卯の日杖 卯杖 卯の日杖 卯の日の悪鬼を 卯杖 卯の日杖 卯杖 卯の日杖 卯の日の悪鬼を

蝶　毛虫　魚氷に上る　月令 孟春之月、魚上氷　孟春餞端の事に出して魚氷に上る

初鰯　飯蛸　梅　和名宇女　潛確類書 梅四德を具す　初生の蕚は元旦の花に拝す云々

鮒子こぶ　鹿角菜

厚菜

衣食類

治聾酒　鰯　贈

煮鰈

神祇

初午

水間祭　本妙寺祭

摩耶祭　東福寺戒法

吉野餅配　八幡初卯

大原野祭　行基祭

園韓神祭　春日祭

二月堂行　同水取　同大松明

薪能　芝能　若宮能

比良八講　祇園八講

五穀祭　常樂會

涅槃會　釋迦像　佛の母の終　雪の果

遺教經訓讀會

積塔彼岸

時正　時宗踊念佛

柱炬火　淺間祭

聖靈會　北野祭

ひ者の紅なるを梅の花ひらくと云ふ　梅の花ひらくを梅の花ひらくと云ふ　梅の花ひらくを梅の花ひらくと云ふ　梅の花ひらく

部類 伊勢貞丈記新考

菓餅所供

水口祭　道明寺祭

公事故実　献生子

季御讀經　列見

釋奠　祈年祭

紀元節

又一樣の接物にて枝地殘りて卧たる龍の如し故に外題の名物を「而倉の竜」とつけもせまめの物　歳雪山家暦。山中にて梅の咲を見るを云意

白東籠岳方自十二月至二月云

梅花衣　称念院御抄　梅重衣濃紅裏白梅　遺蹟抄　梅衣表裏白梅

白東籠岳方自十二月至二月云

鶯衣　鶯袖。　藻塩草　蘇芳打　古今賦の縫ものの

衣の柳と東方神と云　右の色と同じ色名に因て衣と云

鶯菜　詩経　出自幽谷遷喬木　古今集　鶯乃

鶯　詩経　出自幽谷遷喬木　古今集　鶯乃

谷より出るを喜去と云　鶯く報喜を云　和漢三才圖會　鳴

紀を尾を搖を尾を搖を　唱　人の舌鼓不似　立春に至りて始て鶯　季喜に出る事を声清亮

同潤を　鳴　紀は急まして長し　注花鳥

○鶯如し　或は　月日星と　如

○鶯鳥　鶯を云　古今序　花を鳴る鶯　始て鳴

清山記　正二月に鶯あり　鶯を喜去と云　鶯く報喜を云　和漢三才圖會　鳴

三月之部

乾坤　上巳

桃花之節　桃之苦匂

雛祭　雛うさぎ　雛ひつじ

立雛　女雛　白東雛　抱雛

柳太刀　柳のえだ

粥　干　古佐の海苔取

曲水　めぐる盃　盃を流す

巴字盃　明鏡を飛す

忘霜　別名霜名残の霜

八十八夜

紅毛石　初虹

焼塞　巨燈塞

汁椀をきれいにしたしたるものいつ是を汁椀をよく洗ふを云　こうもりの云　こうもりの云

●金衣鳥　鶯の異名　関元遺事　明皇華清宮中に於て黄鳥を呼て金衣公子と名　故金衣鶯の名有

●黄鳥　詩経　出自幽谷遷喬木　古今集　鶯乃

大きさ鳩の如し

●喜苦鳥　鶯の異名　以上鶯の異名なり　●鶯笛　鶯の

音色を吹

笛音色

鸞　和漢三才圖會　鸞　鳳凰　しらく鳴る時声清く雨鳴をして

立春に至て琴を弾く事を止て鳴る故に俚俗鶯琴

を弾くと云　雄は鳴を呼び雌は雨を呼ぶ雄を鸞

と云　雌を鸞と云　雄は鳴を呼び雌は雨を呼ぶ鸞

鸞しく声鸞なり故に鶯を鸞と云

遅日江山麗　○美麗、花蕊妍麗、など続く皆美

色の百合咲紅の如く山川すべて色めきて美をかがや

意也　獨活　本草別録　此草風を防て動のぞ風を

裏白　①　藷初　②　松葉の葉蓋　蓋

の　鬪斗　下部古事記

曲水之圖

酒盛る所に幸遠い茶碗に其角
醒不醒李の詩人蘇白し、
惜花不掃地
紅奴落花紅餘許し金、

天照太神伊勢国五十鈴川上に神代の人形を写ぜ
移して国家を作るものと打敷を敷

野大根 ノイコン

西土のふとね根掘の大根也

巻三春物

海苔 ノリ

説文 苔水衣水土潤気所生在氷霰 ●青海苔 青海苔 紫の帛の如く
多くは生も伊勢の産を最上とす ●甘海苔 甘海苔
凝て石上に生も是を四時の堅色を取て最も手俗客
て神仙菜と云 ●海草海苔 武江石川の色を採る最
佳味あり ●於胡海苔 海中石上生も孔髪の如くして
青色を変じ海苔と云 ●搦海苔 高麗の国海苔
産も色を変じ紅色を搦の似たり 搦屑を布生雲に
浸し苔を食し ●素麺海苔 長くして色青黒
海苔紅色にして石につきて生も ●鬚海苔 鬚状鬚の如し
生を臘月これを取る ●黒海苔 若布の海中に
海辺の岩間に生て鬚状なる雪を波の打浸を拓子として
凝りて海苔と云れ生ず ●真海苔 甘草の如く越の名産にて
分長さ五寸ばかりに頗る厚し色黒 ●真海苔 長さ五七
紙の如の産 ●十六島苔 ウツブルイ 出雲の産 甘海苔の類

杞

御歌會初 ウタカイハジメ

朔日 年号

春

行春 かへるさ

春の限 春の別

三月尽

植物類

桃花

白桃 緋桃

源平桃 ゆめもも

櫻

山桜 八重桜

花桜 遅櫻

緋桜 江戸櫻

家櫻 陽芳櫻

西行櫻 吉野櫻

孫生山 叶ヒ 秋夏待 夏来る紀友降 暮春

に成れる所を伯し宮内省へ上送せる所を許さる例を
一月十八日を以て行 立春宮后各貴官く重
吟詩新年を記載も行遠所に向て一日三十日を限る
お草

冬

元日 クワンジツ

元朝。 三朝。 日〇朱子曰元犬也始也

玉燭宝典 正月一日為元歳之朝月之朝日之朝故曰三朝
尚書大傳 正月一日為歳之朝月之朝日之朝故曰三朝
魏宣傳 元日歳之始月之始日之始故曰三始云々

國栖奏 スウ

玉栖笛。

日本紀 應神天皇十九年冬十月朔幸吉野宮時国樔人来朝之因
以醴酒献天 玉栖十三人笛吹人但第之 延喜式 諸節会に吉野
皇而歌之云々 二人山城国綴喜郡の玉栖の部を献し歌曲
を奏も節あり千七人を以定る 江次第 玉栖の笛八兼明門の外に於て奏也

西陽雜俎 柳に七絶句一に寿六に和賓客
今新年嘉祝の物として遊衆甘四八此義也

蒔蔓 クキ

本朝食鑑 蓴立ハ久久多知と訓も蔓
菁に麦二三月に至て蓴肥大ず繁る

具足 グソク

串柿 クシカキ

鏡開 カガミビラキ

紀事 凡鏡に六具あり悉く具足するの
謂に奥まる処の具足の餅特に刀を以

花橘を名づく

(古)

木は本さ汁も膾も橘の酸 芭蕉

故土橘秀石の庭前にて

さつきの車にかけ橘我 仝

明年や橘さかりの奴山 其角

花ちるも毛虫ちらしの橘 嵐雪

素守や白きかしらを突かるも 去来

字かくと来て赤足の笛を吹く 犬草

五月雨に日ぐらしてお足の酸 野坡

ちるを沈くやけるを花のすい吐山 臭室

落葉ちりけるうか 花の橘し我 信徳

(中)

花ちる春の雨紙子の白乳 蕉村

写さまさる花盛人のあるろう春 士朗

山ゝや花と書く記杖の先 冥更

ちるを書く動くものなし花の音 嘯去

花ちる春に暮く野人庵の郎 蓼丸

雲の杖入る風とかすみ雲 楊富

いろと書く花の盛り峯の雲 楊貴

月代や橘さ風のあ一 昊

人墨一竹ちるを紙を橘ちる 一白

山陰に入る甲斐の国遠き今 禾木

庵のちる春を泳ぐ橘 祖仙

て截とを忌む故に手を以て捉をし捉を以て是を截の字を忌故あり

藏閉 雜談抄 和俗年の始に藏を閉て一切の賀戦を禁謹用に充て要買の事を蓋年

偶倡師 夷廻りとも云橘 西の宮より

一説に夷三郎殿歳の始に魚を笑ひを以て富貴を求らんとの託宣に依て夷の物

都を始め方々偶倡

食摘 今の俗語にて蓬莱 食摘

白作もの古〳〵食摘 今の重箱の

白作もの古〳〵食摘 今の重箱の

夫婦水 柳原一

本朝食鑑 白久和井云 浅山中に生る三月黄花を五月に

養父入 黒海苔の上元の条に出

(近)

花を忘れ 古今 蓋を忘れ 古今 雨は日人を忘れ 古今 春の雨 有節 春昼 九起 月の夜 紀貫 義しき 弦池 徳山 志水 花の 紀貫 花見 風 人を 花手 楊通 楊左 寫山

人丸橘 猛寒橘

蒲の尾 普賢象

雲隠橘 重井橘

橘を妃 藤ろ谷

休名子 夢見草

太山府君 犬ざくら

白橘

藤法橘

伊勢の三蔵 吉野草

暖炉 かぶし草

花

襄美は花

古〳〵へ八月十五日限り藪入も今日定限り藪入る宿入の語源と云説は男女実家に

厄神祭 蘇民将来。山城国綴喜郡官幣大社八幡一之 十九日

也○季吟曰神代に牛頭天王蘇民が情を受ひて疫神の社と云ハ非也 富士の麓の人民の木符を立て蘇民の子孫と云札を受て

厄神ハ牛頭天王の眷属なり

山笑 卯槌 採

兼三春物 **柳** 本草 時珍曰揚ハ枝硬く揚起 也故に柳と云蓋し一類二種之春初葉黄を生し

流も故に柳と云 即ち黄葉花を生ずる也 春初葉長成の後花

部類 伊勢崎時記新編

画の花 織物花

花見 花寺

花の雲 花墨

花の雨 花の雪

花蔭 花筏

花むしろ 花筵

花の宮 花の幕

咲きそろふ 唐なし

木蓮花 果樹の花

馬酔木花 庭梅

蘇枋の花 長春

石南花 沈丁花

花盛

花の主 花の宴

花の波 花の勝

花の雪 雪ふる花

花傘 花車

花の絡 護摩絡

海棠

林檎の花

中江黒細さを結ふ蕊花て繋ぎ白紙のごとく風因て飛ぶ子衣物に着ハ絹出ぬ池沼に入て洗を

○柳鬢。柳の眉。びんぐき 柳の枝を女かみ髪に

○柳 隠。柳の眉。美女の風流を立てるたとへ

○柳 墨筆を以て○川柳 少陽に子望国

く夫て枝極く硬くして水を吸ことなきを又蘆柳と云○

門柳 陶淵明が宅の四に植つる五株の柳を載自ら

号も五柳先生○玉柳 往美の名あり玉柳五柳と云

○撰柳 一名 絲童柳 [後漢書] 云西京雜記

花の絡 護摩絡

花むしろ 花筵

花の宮 花の幕

花の雪 雪ふる花

花傘 花車

○撰柳 一名 絲童柳

花の絡 護摩絡

花むしろ 花筵

花の宮 花の幕

咲きそろふ 唐なし

木蓮花 果樹の花

馬酔木花 庭梅

蘇枋の花 長春

石南花 沈丁花

幸夷

連翹

小手毬の花

小米花

梨の花

海棠の花

山梨の花

木瓜の花

李の花

胡桃の花

茶摘

幸夷

連翹

小手毬の花

小米花

梨の花

海棠の花

木瓜の花

李の花

胡桃の花

茶摘

四季作時記新編

三月 植物 一月 まけ

十九

ま

舞物覧

十七日 [紀事] 清涼殿東の中庭に舞楽

の舞台を設け諸の花下に設備物なり

松囃

謡物。[紀事] 公武の両家松柏子の儀俗

正月元日より十五日至て唱謡し或

古歌舞し是を祝して松舞と称し松は長久の

義を取る [豊臣秀吉公家譜] 天正十五年正月二日猶物の

法士時賀祝を献ず

松の内

注連の内。正月十五日 迄をいふ

松の花

十二月の花。正月に門の字説に云松柏は百木の長と

松は公に仕へ二月製を抽て花を

生ず長四五寸其花英を乗て松黄ともいふ [漢書] 松

の実は十四花として十年に一度花咲く或は百年一度に

松菜

[救荒本草] 鰊蓬 一名 塩蓬 水傍下湿の地に

茎あかざに似て茎は蓬に似て茎葉多し

同じく青子を結ぶ

萬歳

千寿萬歳。[紀事] 子孫万歳ハ

大和国窪田若尾

柳衣

[冬平公御記] 八市雪 四

面白裡青 雪の柳に青

柳

[後漢書] 陶侃の字 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

[後漢書] 五柳先生 [晉書] 陶侃の字

菜 搗 令 法

鄭 躅

紅はじき つじ　きり傷つし 腫はじき

蓮花つじ　ぞうつじ　ぞうつじ　殷つじ

洗葱つじ　ちりつじ　原ぞつじ

藤

蕎の粉　ちりぞ　ちぞ　蕎　ぞうぞ

蕎 綿　ぞちぞ　ちぞ

八重山吹 ぞ搗 棠

山 吹

けはんぞ　仙 臺 萩

ぞ 羅 葉　ぞ 菊

母 子 草　さ ら ら ぞ

の西村より初る 四田 著述 二流見也 一月 寿 禁 年 へ 寿 ぞ 千 寿方 鄭 と云 ぞ 河 方 業 ぞ 唱 秘 ち 大 河 定 基 の 作 と 又 ぞ 河 守 ぞ 任 し ら 寿 し ぞ 紀 共 民 ぞ 佛 教 信 衆 の 国 縁 ぞ 数 へ 来 り し も 寿 る 寿 ぞ 河 方 業 乃 ち し め ぞ り ぞ

町汁 紀事

活下の旧俗 正月十日の朝自ら膳食饌 奠く 會 新 出 仕 て 此 月 頭 人 一 汁 を 設 く

これを汁會又十日汁 あぞ 唱 人 喫 し 吳 て 法 令 を 禁 ぞ 数 人 町 中 の 男 女 此 式 を 守 る 事 月 九 月 も 同 様 云 ぞ 今 拍 ぞ 寿 一 月 町 汁 ぞ 吳 ハ 総 代 ぞ 五 人 組 ぞ 他 町 ぞ 面 く 集 會 し 以 て 外 年 の 賀 盃 を 酌 む 是 町 汁 の 始 ぞ 因 る ぞ

兼三春物

鱒

孫炎曰 鱒ハ好んで独行す 苦んで 必 ぞ る ぞ の 多 り 故 ぞ 字 尊 を 以 て 必

け 鶏旦

人人 ぞ 貴 赤 章 好んで 螢 蜉 を ぞ る 網 を 張 ぞ る ぞ る ぞ く ぞ る ぞ 云 ぞ

外記政始 公事根源

ぞハ吉日 ぞ ぞ ぞ ぞ て 行

東方朔占書 歳後八日、一日為鶏旦

正月元旦の政を

懸想文 活 ち の 大 神 人 烏 帽 ぞ

行ひ ぞ め ら ぞ 云 く

嫁 ぞ 赤き衣を着 白布 ぞ 頭 ぞ 覆ひ 僅 ぞ 眼 ぞ 彩 し 嫁 ぞ の 日 ぞ 赤き文を作り あれを 梅 枝 結 付 人 ぞ へ ハ 賜 ぞ

九 ぞん 草 七 ぞ 叫

金仙花　金鳳花　ぞび 祢　形 ぞ 葉　蒭

鬼 ぞ ぞ さみ 習作 花

丁子草　董 叫

ぞ ぞ ぞ 丸 一 夜 草

弱引草 一 ぞ 草

馬 蘭　茅 花　茗 荷　ぞ 葉 ぞ み　若 菰　櫨 花

通 草 花　水 蕗 の ぞ　三 月 菜　三 月 大 根

青 麦　叫 搗

掛 ぞ 文 ぞ ぞ ぞ ぞ

生類

海初生 多雲ニ入

呼子鳥 多帰る

鷹の巣 鶉の巣

時鳥の巣 蒼の巣

田鼠化ヲ鶉ト成 **麦鶉**

ちはふ 麦まき

ふあゐ 鮎汲

柳蚕 乃市鮎

楊 鮒 **さくら貝** 蛾

ふあゐ 鮎子

鯛 鯛 **時鳥貝**

蚕

卯 初寅時ニ用ル多ク此日鞦韆近辺西の山麓ニ多ク山樵を構ヘテ中ニ縄を引テ簀を敷キ少し美侍の人ニ猛石を乗セ其ニ或ハ紙を簀ハ引上テ中ニ坐し猛石を入テ再び御き図ク番部と云 **鞦韆** 公事根源 是ハ太極殿ニ七十日の間家内を祓ヘ玉体を護持奉る為ニ始テ是を構ヘ出ル分国家を祈祷せらるる事ハ朝家を祈祷中ニ此儀ハ分国家を護持奉る為ニ始テ是を構ヘ出ル分国家を祈祷せらるる事ハ又云○御斎会内論義。同書 正月十四日ハ法勝会の結願ニ内論義ハ殿ニ行ル御物忌の時ハ南殿ニ行ル問者講師ハ東ニ有ル御所ニ論義を是を内論義と中ニ文天長十年正月廿四日延暦寺の僧圓澄をめしテ論義ハ行ハレ是事此事起ル

卯 初寅時ニ用ル多ク此日鞦韆近辺西の山麓ニ多ク山樵を構ヘテ中ニ縄を引テ簀を敷キ少し美侍の人ニ猛石を乗セ其ニ或ハ紙を簀ハ引上テ中ニ坐し猛石を入テ再び御き図ク番部と云 **鞦韆** 公事根源 是ハ太極殿ニ七十日の間家内を祓ヘ玉体を護持奉る為ニ始テ是を構ヘ出ル分国家を祈祷せらるる事ハ朝家を祈祷中ニ此儀ハ分国家を護持奉る為ニ始テ是を構ヘ出ル分国家を祈祷せらるる事ハ又云○御斎会内論義。同書 正月十四日ハ法勝会の結願ニ内論義ハ殿ニ行ル御物忌の時ハ南殿ニ行ル問者講師ハ東ニ有ル御所ニ論義を是を内論義と中ニ文天長十年正月廿四日延暦寺の僧圓澄をめしテ論義ハ行ハレ是事此事起ル

船曳祭 正月二日船ニ酒饌を供し以て船神を祭ル **番** 初寅時ニ用ル多ク此日鞦韆近辺西の山麓ニ多ク山樵を構ヘテ中ニ縄を引テ簀を敷キ少し美侍の人ニ猛石を乗セ其ニ或ハ紙を簀ハ引上テ中ニ坐し猛石を入テ再び御き図ク番部と云 **太箸** 雑談抄 箸の事ハ蔵人の初ニ云ハ軍義勝幼少ヨリ治世の時元日規式の箸ハ七十年の秋蔵人ニ云ハ光中山内舎人義政続く治世の時ハ箸ハ市ニ有ル **福藁敷** 家庭ニ正月神を祭ル初て太箸と移ル **福沸** 雑談抄 正月神を祭ル初て太箸と移ル **福藁敷** 家庭ニ正月神を祭ル初て太箸と移ル **福沸** 雑談抄 俗ニ七日七種の粥を福沸と云福生果ハ餅の異名今日粥ニ餅を入テ吹沸 **諸蓋** 本朝食鑑 冬十二月宿根花ハ咲ク正二月ハ花ハ咲ク初め地を出ル時ハ蓋ハ開ク開ク者黄色

鶏合 獣つるも

上り巣

衣食類

草の餅

二 **桙子** 大和本草 包橘ハ橘ヲ小ク切テ飯の蒸シ上ル **昆布** 和漢三才図会 干大ナルもの一様ニ切テ林を成ス葉長キハ二三尺ニ広ク人縫を以テ刈る松前の産を最上ト事ラ称ス **御斎会** 自八日至十四日 公事根源 是ハ太極殿ニ七十日の間家内を祓ヘ玉体を護持奉る為ニ始テ是を構ヘ出ル分国家を祈祷せらるる事ハ朝家を祈祷中ニ此儀ハ分国家を護持奉る為ニ始テ是を構ヘ出ル分国家を祈祷せらるる事ハ又云○御斎会内論義。同書 正月十四日ハ法勝会の結願ニ内論義ハ殿ニ行ル御物忌の時ハ南殿ニ行ル問者講師ハ東ニ有ル御所ニ論義を是を内論義と中ニ文天長十年正月廿四日延暦寺の僧圓澄をめしテ論義ハ行ハレ是事此事起ル

孝明天皇祭 一月三十日 今上帝の先帝ニ御陵ハ京都泉涌寺の山上ニ有ル海 **木の芽** 萬木の芽立ル 説文 芽ハ萌芽ニ

蕨の餅	蓬の餅 母子草	
桃の酒	茶の試	
かぎ茶 きゝ茶	櫻衣	
櫻うやく	山吹衣	
神釈		
已日稜	頂广の稜	
經供養	石山祭	
粟津祭	一条ちゝ祭	
水尾祭	安らゐ祭	
高雄法花会	吉野會式	
礼拝講	一切經會	
釜導忌	壬生念佛	

蕨三春物 駒鳥 和漢三才圖會 正字未詳 廿声 高活して長渭ヒカラカラと云 ぐわく走馬の轡をかゝるも如し 廿頭毎に左右へ振り走る のうてゝ 大和本草 形い常に似て大きさい百舌鳥の如 身も深黒く頭のんどはまりの紅褐色 東風 尓雅 東風謂之谷風 法谷風五穀 養育意也 春晴而風曰光風ト

小松引 ㊐ 初子ノ日の条に出る 好文木 ㊋

㊊ 恵食摘 藻汐草 芹の異名 法

蕨三春物 繪踏 吾山遺稿 肥前長崎、五島、大村、平戸、壱岐、対馬、男女、浪人、男女、浪人、男女、浪人

三春 終

○四月之部

乾坤 立夏

梅 天和清天

卯花くたし 短夜

ゆゝしき夜 松葉陰り

大矢数 蚊帳

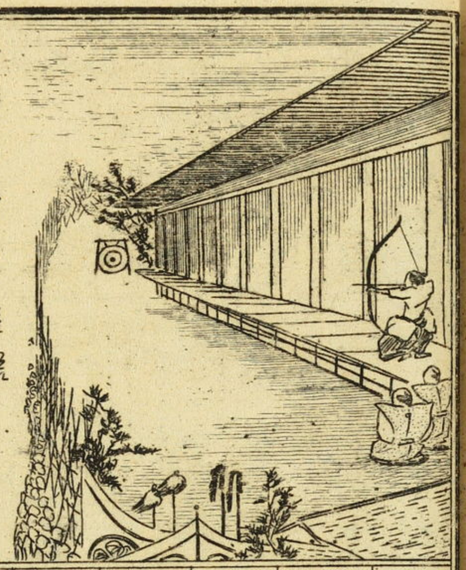
故帳紙帳 汗

汗衫 拭扇

団扇 日傘

編笠 ふの子干

洛東大佛 大矢数之図



植物類

牡丹 富貴草 ゑくるま草

四季 牡丹 花の王

蕾 藥

椹 桑

月十者小豆粥を煮て天狗の害めさ淀中寄上ゆゑ則新凝と記東の方に向く再拝し服されば疫害を避

新玉の年 璞の祇とつゞけて年とふと枕辞あり 初春にてあらゆる日と云ひ日と云へ又

沫雪 釈日本記 雪之脆弱

茜と呼ぶ者あるを改めて云説なり

者如水沫故曰沫雪

葭灰飛 歳時記 立春日取竹為管取葭為灰

以葭莩灰実律之端暦者候気至則灰飛而管通以応六律

ひさご 和漢三才図会 云字

未詳 俗云阿左利加比ゞ形色略圓形ゆゑ大なるも一寸ばかりもの四五ゆ所色あり 蚩蝶 実蝶花の類 俗名

諸国にて多し 絵中に珠なり 赤色 蔓こゝ

無二三春物 **青苔** 本朝食鑑 苔ゆゑ 柔毛ゆゑ 繁深きものを苔と云常毛

芦の角芦の雛 ㊀ 青海苔 ㊁ 海苔の新芽

角ぐむ芦の芽出 初の紅 ㊂ 海苔の新

さ **三稜打** 又左義長。どんど。吉出揚。爆竹。

十五日 徒然草 左義長は正月に打るぎちやうを云言院ゞ神泉院とつゞして焼ゆゑ法師の池とそ

さやもの神泉苑の池を云 和漢三才図会 正月十五日法

住殿の庭に おゝく書竹を焼く以て吉書を天に上る十八日

すも亦竹を飾り 拍子を掛て 鼓を打て 二人 三人 鬼面を被り赤熊の

唱文師 丈黒杉丈夫丈徒四人 髪を蒙り二姫は太鼓を撫へ二童

髪を蒙り二姫は太鼓を撫へ二童 子二人 赤面 赤熊の髪を蒙り 脳鼓 ゆゑ

軍文類聚 爆竹は神異経に云西方深山の中に人有長尺

余り人を犯し寒熱を病む 爆竹を焼 名つけて山臊と云竹を

いとく 竹を焼 爆竹を焼 爆竹を焼 爆竹を焼

語中家々今暁爆竹を焼 爆竹を焼 爆竹を焼 紀事

いとく 爆竹を焼 爆竹を焼 爆竹を焼 爆竹を焼

て今彩の小玄粥を煮る ○或云漢明帝正月十五日仏経

道書の説者を試るの遺風也 是左義長なり 凡民間十五日の

弧毎家の飾松竹浮連縄を掛 毒あれを焼を止年止と

云云の小豆粥 異音の説 筆を 書を 書を 書を 書を

椹 桑

紀事 倭俗祖公を椹まゝ云又云猫引

玄縄を云黄の家に献も或云猫を乗して

麦ひも草 花の草相	蕎子麦 花の若	けしの花	美人草	葵 加茂祭の二葵草	立葵	一入 麦苅 茶せん草	麥秋	著莪	紫蘭	風車
おつまつ	かぼそ						茶挽草			

余寒　若楓　木下雪　桑　桜の実　うつぎの花　卯の花月夜　菖の花　牛蒡　薔薇　白丁花　要の花　桐の花　柚　柚花　柚の実　雪解　旋行札切　弓始　楪　雑部　三春物　目刺

頃きり雙なる角羽根の頭頸胸腹翼尾して光りあり頬眼の毛なる尾長くして文彩あり翅短くして蒼黒斑色胴長く雞に似て動し雌は黄赤黒斑して文略く尾短し

甲陽軍鑑　弓始は正月七日豹尾黄幡を忌む豹尾を係て尾の頭を踏て黄幡の尾を射べし　陰陽暦　黄幡の方吉　始

湯殿初　雑談抄　和俗歳の始沐浴する事湯殿始云

柚　柚の

雪解　陽春の氣あい来り日手の雪消

旋行札切　旋行上人

楪　吐木新葉生ずるのち後に舊葉落つ故に譲葉と名づく又親子仲睦

弓始

[金衣鳥經] 書事揚 ㊂ 雪の事出る 左義長の条出る

[延喜式神名帳] 諸河の国名原

荒れたちの花　厚朴花　青木の花　美絲の花　岩梨　岩藤　盧橘　花たちばな　常盤木落葉　茂り　木ちげる　木ちげる　密柑の花　柑子の実　金柑の実　橙の花　九年毎の実　招穀の花　雲州橘の実　たかん部　筆　篠の子　篠　豆植　夏木立

白散。度嶂散。東廂に出て御歯固の内膳を供ず次に一献前分て薬子に賞しまさて帝に奉る次に二献を供ず則白散に車螯を供ず此度慶賀散〇業子に御生氣の歳なる童女に授ける事を求めつるめ

供御薬　菓子。屠蘇。

三物連歌　三物俳諧。三物賣。　紀事　正月七日の夢

箕面の富　正月七日の夢

三保祭　十五日

吉山椒落

蓼

刈葱 松茸

蓴菜 水入菜

海苔

生類

鄭 乙

四季の田長

猪鳥

鷹 ちや入

ちや鷹 宋古多

行〻子 ちゝ原雀

鶯 併子 老鶯

郡御穂神社 麿長年中より産を乞ふ古来神
樂神鉾 神幸の日湯立まゐらせ大永二年細川孝範の長
今ハ神供神酒の祀のみと聚多ゝ

水入菜 清の近郊
雌の間に水を絞へて
滋養まを五八葉云

蓼 三春物 **水蓼** 春陽を迎

三葉芹 二月苗を生し一本叢生して亞相と三葉芹を附く

四方拜 元旦 公事根源 主上天地四方の山陵を拜し年災を祈る宝

作を祈り
後人云

七曜御暦 元日の節会に中務省より陰陽寮を率ゐて奏する也

公事根源 七曜暦に八日月火水木
金土を記したるものゆゑ社暦なり

試筆 吉書。試毫書初。

年の初筆をろくに
試簡、試題等

春盤 生菜。 容人月令 立春の日生菜を食ふ新を迎
の意なり立春の日菜餅を以て相饋遣を喜盤云

真言院御修法 自八日至十四日 被行之後七日御修法也 帝王編年記 兼和元年始て
真言院を宮中置給ふ家五穀豊饒の爲なり年一七

山城陽郡を行く野田八幡宮の山乃
茅国云ふ所の俗なり杜鵑の白

杜鵑 顔の 格子郡 曷城峠 東白川郡碧山

歴くの下馬乃
形ふし保くきゝ 史南
花所の 駅ちく 松きく人ふ
文口 智月
支考

叙位 五日 公事根源 天智天皇十四年正月
諸臣爵位を授ける日を限り俗
叙位儀まり是ハ法皇の年号を奏して位を叙せらるゝ

御子祭神事 十六日 伊勢国 渡会郡
山田御祭の八社参詣の人一頭丁ゝ是を
獅の作るし氏子敬ひて家ゝ
特く恵神を切拂ふ俗ゝ即時祭を
色ゝ多社へ祭る祀ハ疫癘を避る爲なり

上元日 花燈の夕。正月十五日を上元と云 七月十
五日を中元と云 十月十五日を
下元と云 花燈の夕とは唐の世の上元の夜燈油を
列し游観まる故云 五雜俎 天下の上元灯油の盛な

下萌 月令 是月也、天氣下降地氣
上騰、天地和同草木萌動ス

白魚 春 魚

銀魚。
鱠殘魚。 紀尾三戈國云 俗云白魚紀伊の産なり魚類乃
初て出る人多を賞ま二三月に至り子を持の時

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○

[illegible]

[illegible]

[illegible]

部類 伊勢歳時記新撰草

子子　蚕し　虫　かはかむし

水馬

青鷺　鵜飼　移つゝひ　移川　移舟　うまわ

通し鴨　鵜　鷺

美濃長良川鵜飼之図

余、蕾不合雪、文国主神、天照大神、二月十五日小豆粥を煮る又粥を煮る時竹管を釜中に入て五穀及種物の耕作吉凶をトひ参詣人に告知す。

雲雀　三才圖會　告天子　鶺鴒　鶺鴒

海上叢草の中に曰く、黎明に詩に遇天時、春雲則旦飛且鳴直上雲霄、色一に云叫天子、○紀州の海に

鹿尾菜　本草　玄南の海中石産の草なり

鉄線草の

干鱈　和漢三才圖會　乾鱈　魚の白きものを水に浸し毛を去て黄を帯るものを干す

角力を好むもの常に嗜む云

鰈　或説に比目魚　ひらめ　ひらめ　ひらめ　ひらめ

木の切株の細き芽を生ずるを鰈と云

百千鳥　八雲抄　千鳥

春百子の島の好物と云

海雲　和漢三才圖會　海温　水雲、俗に海雲の二字

鮎　つぶ貝　鰍　小鮒　水鮫　小魚　鯊　水鉄　魚　やまめ

衣食類

更衣　白かさね　衣　**袙**　衣　**袷**　**卯花衣**　袋ぬき　**帷子**　**橘衣**　**麦酒**　**新茶**　**古茶**　**茶詰**　**生節**　**新麦**　**麦刺**

四季非常成時記所共通

せ　節振舞　節小袖。夕節　紀事　高海の俗

親城明文、豆腐を設け饗応を節と云節とは白の下略なり蕎麦神を祭へし多い饗応の時を出

兼三春物　芹　本朝食鑑　水芹、一に水英、水旱及び赤白の二種あり水芹は水中に生じ

根多く早芹は多地に生じて根少し

子春百歳　生菜　春盤の菜肴

す　住吉の御弓　二月十三日住吉の御弓式社人正鵠を射へし矢三寸の的を立て立合ゝこれを射る勝負

洲蛤　海の住吉の海先蛤多し漁人

神変の式に云

一月之部終

冷し汁　耆冷し
ひやし鱸　蟹ひやし
干鱈　干鰈
干鳥　絨
鹽鳥　絨
鮓　風爐の茶

神釈

筑紫広祭　鍋まつり

貴船神事　虎杖まつり
住吉卯祭　稲荷祭
大神祭　八幡祭
山科祭　多賀祭
賀田祭　平野祭
當麻祭　杜本祭
梅宮祭　松尾祭
當宗祭　大津祭
手安天神詣　山寿日使
龍田祭　久世祭
萱宮祭　御影祭
國祭　三社の日　加茂のあれ

舊正月　太簇 律　立春 節　雨水 中

睦月、王春月、孟春、夏正、上春、太郎月、初空月、雲初月、早緑月、年始月、萱新月、以上異名

一月　小寒 節　大寒 中

政始四日、新年宴會、五日、陸軍始八日、孝明天皇祭三十日、

政暦に記載する略　四方拝 一日　元始祭 三日

二月

い　虎杖 イタドリ

蘊頌遺經 虎杖三月生苗莖如竹等杖上有赤斑點

初生分枝子葉似小杏葉七月開花九月結実○時珍曰杖其莖云虎其斑云 陵拾遺集 三月ばらく時草を

ゝ行ゝる「時を経ハやよしの月はゝ

ゝ行ゝる　菅原義孝 章善抄

八雲御抄 あどろさいぐ はゝ去のゝ草をゝ

ゝ行ゝる 和抄 虎杖ゝ行ゝ一種二名ゝ国ゝ紀をゝ

ゝ行ゝ杖ゝ

糸桜 イトサクラ

大和本草 樹ハ彼岸ニ枝長ク垂ル

彼岸桜ゝ花ゝ

は　初午 ハツウマ

二月上の午日ゝ 神社敬蒙 山城国紀伊郡稲荷山稲荷神社有ゝ官幣大社ゝ宇迦神ゝ大山祇倉稲魂神ゝ羅州府志 書社の出現ハ和銅四年二月九日ゝ初午日ゝ行ゝる毎年二月初午の日諸人群参ス米穀衣食の祖神ゝして蒼生安逸の神社ゝ門前家ゝ百穀の種を変又ゝ物の状見人形の者多ゝ有ゝ特産焼ゝ云ハ狐の特産の品清ゝ造神ゝ云ゝ民家ゝ稲ゝ葉の麦を食ゝ元ゝ伝ゝ人神前ゝ投ゝ麦ゝ蕎麦ゝ云ゝ麦を吉兆ゝ

初雷 ハツライ　初電

月令 仲春月雷乃発聲始電

蟄虫ゝ始動

蜂 ハチ　同巣

蟄虫ゝ始動　名ゝ蜂ゝ土ゝ蜂ゝ大黄ゝ行ゝ赤翅ゝ蜂ゝ蜂ハ夏月暑の中ゝ行ゝ已ゝ子ゝ羅の食物ゝせんゝ為ゝ蜂ゝ巣を結ゝ行ゝ山蜜ゝ云又大樹の洞中ゝ行ゝ本蜜ゝ云家ゝ蜂ゝ家蜜ゝ云元蜜を蘖ゝ行ゝ紀ゝ陸ゝ行ゝ一上品ゝ

山王祭　葵祭

神祭　中山祭　近江八幡祭

向日明神祭　水屋能

山嵜祭　清瀧地主祭

塗裁祭　練供　粮

神衣祭　士塔祭

戒檀堂冠帳　花摘

憂入灌佛

佛生會　浴仏

花卿堂　桃華會　佛の産湯

茸茶供

麁　麻の性潔ニ、牡麻数の牝ニ交る牝孕む九月ニして産。

孕雀　雀ノ子。

[未刻食鑑] 雀の性淫ニ、三月秋八九月孕て卵を生む屋甍樓閣の間に棲隙穴社の破竅に巣木のうつろまに巣をつくり卵を伏せふきものを美者とす。

初樓。花を摘山に登り幽山に入り幽谷に遠近の草刈菓を採て去聲の番美して味を求む。

初花

花待　[初学記式] 花笑て待ていうつろはむとをなき命山人て数を繰を去て待まい男ひ

(仁)二月堂行

同水取。　南都東大寺初めて一日より十四日に至る行法なり　[紀事] 半夜加持の行法なり二月堂の本尊観音の像大山二体あり上古より大像観音の前に結て法事を修す八日より仏像の法事あり七日の夜又十四日に

灌佛　花仲堂之図

灌佛の拵の見えり　東西山士朗

千園子　日光祭

和哥祭　花供

四季雜戒雜記新案草

芊ツジ　俗ニ八日花ト云

大切に拵る　頂戴

菓子屋　弱錦子も　夢太

佛の産湯那

灌仏に寺の稚児の稚児実生

芊のつゝ　芊白

骨木花　[和漢三才図會] 接骨木人家の庭園に植る三月小白花を開く　摘て茶に代る

蛾　蝦蟆ニ名螺螂師ハ泉多き所に多し　溪澗に多し形ハ

蛾　蝶ニ名螺螂師ハ泉多き所に多し　溪澗に多し形ハ

韭　韭青く翠ニ根を以て多つべくまた

蒜　八月種く素苗を植る　実蓄を食す秋種を取む

接

銚子取　[和漢三才図會] 南部津輕蝦夷島多し九十月に実を採て赤色を取る大なる物

[和名抄] 河貝子　美用蛾字非也ト略

一月神釈公事聚筆五月　乾坤　二月　記事史　三十

安居 結夏
夏行 夏花
夏経 夏籠 夏書 一夏

公事故事

青簾 扇 桙

○五月之部

乾坤

皐月 端午 藥の日 幟 鯰 菖蒲太刀 神水 神蚰蛛製 印地 竹酔日

ほ 本妙寺詣

初午日 初午之上山の辺 山四祥あり今も

二月初午詣あり此本妙寺山門に掲し七天宮宗の紋
国家の兵士に於ては山門一旦亡び江戸の寺も共に衰
も去ることなし又一寺あるべし相傳ふ道灌公武州那西足
山本明寺を四祥と上の山中に所の本尊馬頭観音と里俗
云傳秀郷が守る本尊なりと
毎年二月初午日冥法修行
惠日山東福寺は法の東南に所り毎年二月十日の紙に寿の
字を書て寺内の同宗庵ごとに出す疫病を除く

こ 東福寺幟法

初午の日方丈に勅使を重く
四日神祇官祭る天武四年二月より始
る 周禮 祈年は求豊年也 神祇式 祈年祭神
三千一百三十二座之内神祇官祭神
七百三十七座 諸国司祭神 二千三百九十五座
此五音河内国志紀郡土師村に居り一名土師寺中興の
僧持の尼覚善を開基の僧無学祖元の法嗣なり公が左遷の時
あの寺に立寄り給ひ天神を
八天穂日命の宮に菅原の社と二社合せて此二社を祭る

祈年祭

道明寺祭

雜說 道寺真の天神を

餅焼之圖

疱瘡の所へ遣ふる幟 其角
ちまき尾の長崎 貞室
○
粽は中国屈原の笹 楊宣
君の代の御宮方中 幟 水傳
小路の太刀佩て来る端午式 兩兆
餅焼て子に与ふ焼子 子風
落ちはてあやめ葺 彩端 宗吏

虎が涙 兩 徽 兩
入 梅 梅雨 梅
さつき 兩

四季非時成時記新採草

鳥巣

古巣。 五雜組 羽族之巧過於人其為巣只以一口両爪而結束
牢固甚於人工大風拔木而巣終不傾也雜木枝
枝縱横重疊不知得膠固無恙此理之不可曉者
凡鳥将生卵先雌雄営巣々成而後産
印伏子及長生毛羽去則空其巣不復用

ち 児

櫻

山櫻の一種なり又山櫻の新芽に別種あり之を按るに
みきらのうちに紅色を含み漢人を畏らしき
花びらの数に児
櫻の称有り

蝶

胡蝶。黄蝶。蝶。 博物論 一種大
風車。胡蝶の変。 さ蝶の名
或は赤又青 蛺蝶の色風流子と名づく一名風車又鬼
子 新撰字鏡 和名加波比良古 荘子齊物論 昔荘周夢て
胡蝶となる栩々然として胡蝶なり自喻て志に適ふか周
周なるか知らず俄然として覚て則ち蘧蘧然として
周なる知らず周か夢に胡蝶となるか胡蝶か夢に周
となるか周と胡蝶とかあらんか

を

釋奠

上丁日 八年根元 是ハ年に二度行ふ二月と
八月と者若し日吉国忌祈年祭
元年二月丁巳始て釋奠を行ふ 続日本紀 文武天皇大宝
元年 礼記王制 菜を釈

五月晴 さつき晴
柏風 ほとへ
半夏生 夏至
芒種

植物類

菖蒲 菖蒲
蓬 ほうつふく
あやめ引 あやめふき根
ほうつふく 佩
六日菖蒲
菖蒲湯 菖蒲
競馬 駒
藥草刈 藥草つむ
百草なつかし 草合
菱川

祭礼を奠て先師を礼す [ちくげせ] 大学寮ちくげせを行ふ孔子及び十哲の影を祀る上卿は少納言文章博士、孝経、礼記、毛詩、尚書、論語、周易、老傳、年四ツ上より講ぜらる

祭 上卯日。山城国乙訓郡に有る書と同神 [公事根源] 此神は皇后の春とせ給ふ神なれば本社遠きゆへ

大原野 毎年彼岸中日に於て四天王寺にて天筆の北八菩薩の画像を掲げ念仏修行あり今日は大念仏なり

踊念仏 法華経を一部宛紙に書て一つ宛結ひ大原野行啓の時の供奉の子細あり

萩の焼原 野焼く時の萩原を云○萩の若芽萩の初生芽筍のごとく生し

臘月 臘夜。一説に獵夜

蕨 早蕨、鎌蕨、初ものゝ蕨手、

本朝食鑑 蕨の初生芽を採て蕨と名る○時珍曰二三月芽を出す葉曲して拳状ちいさき兒の拳の如し

[調歌] 紫壁嬾蕨人拳手○仙人の碁を拾ふ蕨

[雜談抄] 連歌に若芽を蕨と用ひ花穂を

か

春日祭 上申日。大和国春日社の大原野大明神の御祭礼

神経津主命、天兒屋命、天照大神 [公事根源] 大中臣氏の氏神なり

貝寄 [雜談抄] 天王寺法花記に

蠶草 本名毛茸 九二月に生して三四寸ばかりに成る麦の苗の如

鳥 女児是を持て嬰を結ん

花かつみ 菖蒲刈
田植 まこも早苗
なるこ玉苗 若苗田植歌
菱の花 川骨
藻の花 藻を刈
浮の花 水あわの花
花さゝぶ 花かやめ
菖蒲 紅の花
まつむし 鉄線花
志美の花 ばうしん美の花
紫陽花 あぢさゐ四月の末
百合花 さゆり百合

部類 伊勢諸国物語新撰草

玉ゆら	鬼百合 光り草	雪の下の花
萩の花	朝霧草	茅石蓴
うわつり草	蛇床子	夏菊
釣葉	石竹	躑躅
麦	川芎	神馬草
十薬	天南星	石菖
かくばく草	甘天花	施法花

果蓏 八重仲秋 良きを吉日とし善日を撰び惡きを凶とし凶日を避ぐ 春夜登かなぐ惡きを凶とし凶日を撰び去バ去く春夜の艸木の花実を源氏物語若菜の巻に見えたり但空穿の字知なし 鳥の赤決之一字秋良枝 かほ花 うつくしき花 かほ鳥 閑 ○はまうるる鳥 かほよ鳥 一説 何のうるも定めなくなれしうるいもなし

歸鳳 今の鳳 月令 孟春月 鴻雁 鴈の別名 來 淮南子 燕 春分而來 秦分而去 ○今の鳳今いかくやせんまど出 今いかんとやひとつかさ田を入あ

蛙 無声の蛙 長明無名抄 井手の蛙 一説 井手の蛙 蛙 蛙

胡瓜　茄子
粟　蒔きび　蕎
胡麻　荏　稗
蕎豆　引　豌豆　引
莧　すべり莧
あらき　早松菜
若竹　今年竹
竹植日　竹の子　刈

生類

蟬　せみ
蒼蠅　蠅を入
蠅の浮巣　水鶏

蒜の芯を動む者の習　兩脚をもって
十四日臨時に生ずるもの　つくる

月令 仲春之月鷹化爲 **蒲公英** 本朝食鑑 俗云藤菜 孫し或ハ鼓菜 **種浸** 種井。種おろし。種蒔。

和漢三才圖會 和名太太仁之 紀事二月上旬の中吉日を撰び農民田穀の種を水田に浸し彼者の後十日に取出し種を

○種井　田の中に井を掘り井を以て

田螺 雜陸物 タンホ　の名

大根汁花 本草綱目 蔓の末に高く蔓を抽き花開く葉琴色なり

畑野山焼 余雜翼 野人今歳山を焼きて来歳菜を蒔

田 公事根源 太政官に六位以下の藝能なるものをめされ器量容儀を

札列見 和漢三才圖會 和名抄 和名以多知久佐一 以下略 式部式 式部式

つ 接木 接木。月令廣義 梨を接ぐ 蔓分の第十日を用べし

て 蔓の若葉 大和本草 地蔓 ハ衣の紋つけ

ら 園韓神祭 雍州府志 云 舊宮内省 名以多知波世 ハ後禁庭に縊も古へ蔓二月第十一日上巳日を撰る奉議一人祭所に出て事を行ふ式西宮記山

と 燕 同巣。和漢三才圖會 燕ハ玄衣白頸 赤黄の頷に蔓ありて去る鳳凰と表裡をなす

に 涅槃會 涅槃像。二月の別。摩嚴經 涅槃乃清 佛の別名。さとり佛。淨不死之地。

一切修行者所依歸 注 超脫輪廻出離生死之地をいふ死をくるまるなり 如来滅歳七十九、二

衣食類

粽 菖蒲の葉を巻き蓬をまとふ　かざり 粽

柏餅

蝨の子　かぶのこ
波多毛蝨　羽抜鶏
炬　鷲
鹿の子　獣　狩
鼯　狩　照　射
火串　きつを
小鯵　蛆
蠶　虫　蛇衣を脱
蟬抜け虫

部類 伊勢歳時記新撰

菖蒲酒　蓬衣
梅子衣　帷子
菖蒲帷子　菖蒲ゆかた
うすもの　ちゝこもの
ちゝこの明織　夏羽織　うすけぶり
辻ゞ花　晒布
生布　ほさらし　麻布

神祇

松本祭　加茂足揃
加茂競馬　若宮祭
生玉ゆぶさめ　大津[illegible]
宇治祭　宝祭

月十五日大衆に示し已て頭北面西右脇にして滅し中山委しくは天瓶一覧入滅品に出つ○涅槃像に又十二類天道人道地の三十六禽洪河の鱗鬼天地の間に生を受るもの皆慈敷の容形を画くなり二月の別佛の別去は佛あるべきは是なり

な

鳴鳥狩　泊狩　泊山

朝鷹。鈴子さし。泊山とも雲雀の鳴処を守て捕て手鷹に行事に雛子を捕るを泊山とも嶋鳥狩とも呼また云又鷹の鈴とも云鷹の鈴とつゝは鈴付の尾に鯉の尾先より二枚目の鱗をとりて尾羽に巻て巻つけ鈴をつけるなり又れは鈴なり

とりて紀叢に入て奮の居所知れざる時鈴の音にて知るなり泊狩とも云鈴子とも云

鈴付の尾とは雲山雀を鷹に捕るを鷹の名とも云友に奮れ

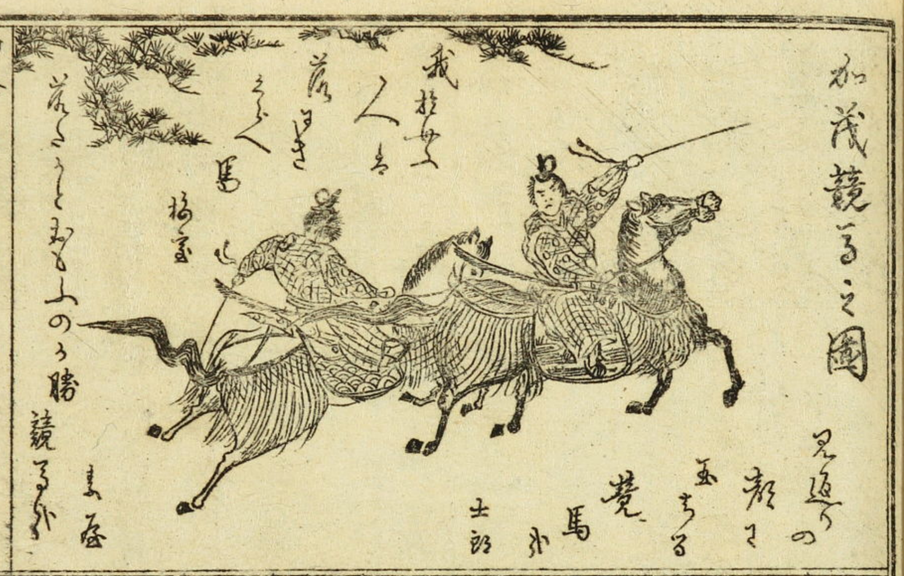
繼尾とは雲山雀の尾を繼くまゝ雲の尾なるなり

尾に鶴の羽を繼ぎ付て鷹を捕るとも云

長茂白尾の

苗代　本朝食鑑　二三月蒔もの也俗苗代とつゝ数種を用

加茂競馬之図



て懐子に先て川水に浸す十五六日或は十八九日及び廿日に五十日もすぎて芽吹り取出して懐子を去て

苗代に四五日六七日を経て後に假田に苗を蒔て

苗代と云名あるも是なり種を蒔て

出て七十二歩を十代とつゝを五代に田畝の数に

五百代千代あるを云代に同じ

を蒔き種蒔ものの名目とあるなり

食鑑　凡稲苗水を得れは枯る故に苗代水を引くの

水口祭　本朝食鑑

祭とは○旱損水損のつゝしみ祈せ[illegible]苗代の水口に幣帛を立て祭る俗頼朝卿の説に幣帛に豆茎

つくりなす故也

苗代菜苴　和漢三才図会　胡頽子　大俗三種あり

を葉を実と時少しく異あるのみ一種麦角に当て

苗を種時実熟も大さ小さき麦のごとし苗代胡頽子

菜花　菜を今人白菜と称ず二月黄花咲き

花の如し四辨三月角を結ぶ亦花の如し

菁花　和漢三才図会　菁地に蒔て生る形ち蓮公英の如くして微硬く香氣あり実をむ

すぶ三角あり未大く水窪まりて三弦の撥の如し

小児を二つを以て相磨きは音あり故に俗呼て

今宮祭　両社祭
有ふしの日　住吉御田植
山田御田扇　大原さし
石榴山詣　富士垢離

公事故実

騎射　菖蒲薬
菖蒲の孔　五月の日
左近の　同
右近の　同
艾　虎　艾人　簾人
菜　玉　五月の玉　五彩糸
長命縷　懸命縷
五月鏡

夫至の後苗を生し二三月細白華さく

む

蒸鰈 カレイ　和漢三才図会　大さ尺ばかりの魚を塩水を以て蒸し干せり取出して陰乾にす　春月賞之

ら

五加木 ウコギ　蘇頌圖經　五加木叢苗を生し葉ちさく青し叢おひ

姥櫻 サクラ　羅山拾稿　この花葉ともに茂り花多く開て葉少し花と葉と共に出る

の

苔葱 ノビル　山原野地に多し生ず野人喰ふ

く

枸杞 クコ　蘇頌圖經　春苗を生し蒸ハ拓摘の如くして軟く白き花さく実を結ぶ

草芳 蘿文曰　能活法の書に正月の節に若艸新艸を出せり又二月の節に草の若芽なり猶長し　梁武

茅の若芽 草芳

や

山桜 サクラ　一重桜の一種山野

寡要　春草を弱草又芳艸とも

熊谷桜 サクラ　大和本草　高さ尺不過ぎして花さく長

菓玉之図

菓玉の長さ　九寸

菓玉の長さ　中等

菓玉の女達

桑の実

桑の実の如き物

桃印符

赤霊符

競渡

石原の祭　競渡

滴水園

水園　白園

摩耶参

佛母摩耶山忉利天上寺ハ摩耶寺創伽藍坊宇三百餘有りて後廃して今僅に存せり二月初巳の日駒馬の無難を祈るとて馬を引て参る也　摩耶参

松毛鳥

千鳥　中国の鳥

ま

薇蕎麦 バソバ　大和本草　林中に多く生ず葉ハ花さく桜の先登り花色白くして小紅を帯たる桜もあり　薇蕎麦

や

山桜 一重桜の一種山野

高さ尺不過ぎして四五尺に過ぎず猶岩桜に似たり八重の花さく桜の先登り花色白くして小紅を帯たる桜もあり　山桜

寡要　春草を弱草又芳艸とも

熊谷桜 大和本草　高さ尺不過ぎして花さく長

○六月之部

乾坤

氷室 ひむろの雪 お室やくり

大暑 炎天 日盛 温風 むくるる山 せんすい 清水

小暑 極暑 ちつき日 あつき日 三伏 風薰 泉 清水せく

清水 清水せく 清水 清水

ふ

二日灸 紀事 二月二日男女灸点を点ず 日やいとゝ 去中華の書に八月朔日鍼灸に云ふ 八月二日又同一和俗二日灸と云

鮒膾 大和本草 膳夫録に云膾は鮒を先とす 膾魚の第一とす 近江の鄙魚なり 一月より三月に至る 近江の人原五郎 膳と云ふ人原五郎 膳を造て是を 原五郎 膳と云ふ 京近江の人是を賞之 汎事

こ

水葱摘 本草 水葵に生ず 葉澤潤に似て小く花青白色 並て喫す

大和本草 浮蕾 三才図会 草木第十 共図に出る 紫花沢桔梗 沢桔梗 沢桔梗 沢桔梗 沢桔梗

紅梅 范成大梅譜 紅梅 美香のごとし 色淡

和漢三才図会 文蛤 海蛤 海蛤の殼の間に寓生し 粗ち小

寄居虫 川原 乳のごとし 産 床

越中梅 大花にして白く淡紅を帯び豊 花は梅に似て元梅の花八重

圓宗寺最勝會 元亨釈書 資治表日 延久皇帝後三条院二年 冬十二月廿六日圓宗寺成る 帝寺に行幸し法 事を修せしむ 薬師の寺仁和寺の南に有り荘厳 都下に冠たり 江次第 圓宗寺最勝會二月に○今寺 絶えり 御室仁和寺の境内にあり 名あり

あ

藍蒔 續日本紀 藍の人家の蔬園に畦を作 く蒔く 二三月 ごとくして苗を生

麻蒔 續日本草 麻、早春に植ゑ 麻子と云 毒あり 晩春に植ゑ 秋麻子と云 葉

胡葱 八月種を下す 葉葱に似て根は薤 入て佳 ごとくして 薤のごとくして 実

土用干 むしぼし 虫ぼし

井戸替 井ぼり

水合 嘉定 嘉定銭

涼風 月涼し

香涼し 納涼 すゞみ すゞしき

川原 乳のごとし

夕すゞみ 門涼み

産 床

船遊び 青東風

書ぢらし 雲の峯

白雨 夕立の雨

簟 抱龍

仲春人作如　秋馬養統

重藤　数登　霞　乱　隻　疲
夏ぶし　糯つく
夏引の糸　手繰
秋　待　蛙　蛸
秋近し　夏ふる紀
夏より後　夏蕨て
夏の限　夏の別
夏ごろ

植物類

沙羅の花　沙羅の梅
蓮

かくれんとく　芦の角　芦しの雛。支考曰、芦しのさきえ角組む芦。いづくハ牛の角の如

組ハめぐむ芦の角　今三月ちや　春もまるる芦の角　芦の角に角ぐむ芦の角

風をふく　通光

さ

西行忌　西行法師ハ左金吾義原の康清の次男俗名ハ儀清、高野院の上北面徳大寺家の被管なり寺馬寄道乃達人なり保延三年薙髪して大実坊円位と号す　隠逸傳

西行曰、和哥ハ禪定の修行ニ吾、和歌ハ仏法を元とす、嘗ニ仏涅槃の日花の下ニ於て死んを願ひ願ハくハ釋迦牟尼の月のもとに、果して建久九年二月十五日卒し　たり　ふく

嵯峨の柱炬　紀事　二月十五日清涼寺釈迦堂の前に大炬二基を建暮ニ及て火を点し地丁人各炬をめぐる弥陀の号を唱へ節を打て踊る是西域ニて釈迦を葬る遺意ニ世俗柱炬と云

座論梅　中花浅紅千葉丈実枝毎ニ四五顆長ちなに随て振落ちるを座を論ずる如し

桜梅　中花浅紅千葉つ　花八重

し

行基

山海巨掠　浦親蓮之図

白蓮や　人新　さまる　夷吐之郎　墓太

ちる弁　赤表　さきさく面乃　はきすうる　士朗

蓮の実や　まるの実紀　ちるる　丸山

皆つる　ちる弁て　蓮の実　芭郎

白蓮や　蜂さを　古のつる　未来

茶　栄西河辺郡昼陽村皇崙山昼陽寺八四十五代聖武帝天平五年草創開山行基自ら茶師の像を構へ本尊及び開山の像を画く八町東ニ池あり則昼陽の池ニ云池中の鶴ニ一眼あり池の魚を釣りて行基ハ姓、高志氏泉孫大鳥郡の人ニ元百済国の王流ニ天智七年ニ生十五歳ニして羅漢ニ云ふ云○行基ハ姓、高志氏泉孫大鳥郡の人ニ元百済国の王流ニ天智七年ニ生十五歳ニして羅漢ニ云

祇園御八講　今後て毎年ニ六月ニ会ニ行る法花経宸筆の義、有又論義有　管家長者記

吉祥院八講　吉祥院八講　吉祥院ハ藤家氏寺天神の祖父清公建立東寺の西南荘和泉国富墓の庄ハ古へより主ニ荒廃の地ニ宣旨を中鴻し神領ニ編入せしめ永く法花八講の料田ニ寄ス　三月廿五日

北野御忌日　菜種

小の中供ニ少神の社ニ献ず宮司の老少相迎へ拝し立て斎殿より神前の階下ニ至り毎ニ是を つくる

の御供。一宮醫中社北野神社ハ山城国葛野郡ニ在り　紀事　今東西の京の御供田を預る家大

部類 伊諸岸時記新新草

白蓮 紅蓮 水芙蓉

荷葉 蓮の葉 うき葉

蓮の実 澤瀉

蓮の穂 夕顔

ゆうがほの花

風葉 時計草

射干 ひのうぎ

日向葵 日車 日向うり

玉簪草 鶯卅

眼皮 薤の花

薄〻ぐさ 約蘭草

ねぎぐさの尾 猪牙花

宮司の一老と巫女文子と直ニ是を取て神前ニ供す是を手供と云又特供と云或ハ菜種の中供と称す供物の上ニ菜花を挿む故ニ去て或ハ菜花つまを挿む時ハ福寿と称

讃經 江次第頭書 春秋二季百僧を南殿ニ請し大般若経を読しむ納言参議各一名南殿ニ着く車を行ふ自餘ニ示殿ニ候す貞観の例時毎季ニ行ふ元慶の天皇践祚之後二季ニ修之ス

季御 本草 初夏地ニ發て細苗を生ず長ニ尺

菊若葉

宿根より生るもの之又種子ハ立春ニ下す二月蕾の多即時ニ芽を出す二候を経て葉始分ル

遺教經會 訓讀會 元亨 自九月至十五日 瑞應山 大報恩寺釈迦堂ハ京都上立賣朱雀の西ニ有元天台宗ニ近世真言宗ニ成る千本の釈迦堂是ニ紀事 此寺に若原秀衡建ル所の堂并ニ華厳経幻年の仏手習せしと云寥ハ今ハ廃頽す毎年此部雪乃果

風翅〻一名ハ児童の誘ニ雪経ニ乗ル毎ハ竜の前に乗ル人ハ去ぐ人ハ遺教と雪と和漢近

讃經 江次第頭書 春秋二季百僧を南殿ニ請し大般若経を読しむ納言参議各一名南殿ニ着く車を行ふ自餘ニ示殿ニ候す貞観の例時毎季ニ行ふ元慶の天皇践祚之後二季ニ修之ス

季御 本草 初夏地ニ發て細苗を生ず長ニ尺

菊若葉

宿根より生るもの之又種子ハ立春ニ下す二月蕾の多即時ニ芽を出す二候を経て葉始分ル

遺教經會 訓讀會 元亨 自九月至十五日 瑞應山 大報恩寺釈迦堂ハ京都上立賣朱雀の西ニ有元天台宗ニ近世真言宗ニ成る千本の釈迦堂是ニ紀事 此寺に若原秀衡建ル所の堂并ニ華厳経幻年の仏手習せしと云寥ハ今ハ廃頽す毎年此部雪乃果

風翅〻一名ハ児童の誘ニ雪経ニ乗ル毎ハ竜の前に乗ル人ハ去ぐ人ハ遺教と雪と和漢近

紙すれ草

麒麟草 赤草 青鬼灯 青ほうずき 薫草 仁 絲の花 紫蘇 蘇の花 茗荷の花 麻 ちぢら麻

藍 苅 蘭 苅 田 田 取 小豆 豆 糸瓜の花 瓜 素瓜

開紅 一種の稗ニ類して八重咲ニ花大ニ赤ク咲ク時ハ紅ニ成ル故ニ名ク活場の挿花頭寺ニ始リ元治元年の兵乱ニ焼失ス

水間祭 上午日 泉州府志 水間寺縁起ニ云竜谷山水間寺ハ聖武帝の勅願ニ依て行基僧正天平年中ニ開闢る処ニ本尊正観音行基四十二象の作ニ二月初午日ニ會日ス

常樂會 拾林抄 二月十五日南都興福寺常楽會今日東金堂ニ開浮提金の釈迦像の涅面ニ涅槃像ヲ画く是ニ今日此涅槃ヲ

積塔 紀事 二月十六日

がんでん瓜 から瓜 姑瓜 茅瓜 青瓜 瓜 葛の花
凌霄 百日紅 早桃
李 桃 林檎
木耳取 竹の皮取

生類

[illegible] 雲雀 鶯
鶯 相思鳥 鶯鳥 蛍
空蟬 せみのから
蜉の抜声 蛍取虫
蚤 虱 虱

金亀子 毛虫
蠟蟬 蟷蟷
虎自取 蜻蛉
鰭 川狩
持網 四手網
羅

衣食類

氷餅 酒
甘酒 酒
出さけ 麻地帷
夏切茶 水の粉
芝明寺挽飯 葛
砂糖 瓜 振商 水

育人検校以下、京高倉後小路清象庵ニ集會シ光孝天皇の皇子兩夜の御子の為ニ積塔會を修せ[illegible]
相傳ふ兩夜の皇子育いまして[illegible]ハ明日皇子の忌日なるを以て[illegible]
[illegible]琵琶を弾ず 聖霊會 摂州東生郡四天王寺、聖霊会とハ聖徳太子の
[illegible]
風葉を聖吳院より六時堂へうつす 時宗曜念仏
會式也 [illegible]大法華[illegible]
彼岸。五条の西中[illegible]を修す 社日 尚書 社日ハ土地
一遍上人第三世應阿の作弥陀木像 社日
委神也 月令 二月節 擇元日命民社 郊玉曰社稷を祭る
の前後ニ近き戊の日を
[illegible]ハ吉甲[illegible] 社翁雨 提要録 社公社母旧水を食す故ニ社日
雨ハ[illegible]社道雨[illegible] 治蘖酒 石林詩話 世ニ云社日酒をのめば耳蘖を治す
シカノツノオツ 鹿角落 月令 仲夏鹿角解 淮南子 鹿生ニ三年ニして角自ら墮

(ひ) 彼岸 時正。 彼岸四德成就經 疾く仏道を成ぜハ當ニ知るべし二八月七日晝夜同

時ニ ハ[illegible]て一切の諸佛三世の諸菩薩及び無数万億菩薩說
法し[illegible]て涅槃を[illegible] 金剛疏 生死ハ此岸なり涅
槃ハ彼岸なり煩悩ハ中流なり[illegible]ハ即般若の一心一觀ニ
[illegible]ニ到る云ハ[illegible]生死の此岸より煩悩の中流をわたり涅槃の彼
ハ年中[illegible]中の昼夜おしなべて長短なく同しき故時の正きを以
て出[illegible] 比良八講 紀事 江湖比良大明神社、古へ今
日比叡山の荒徳法花八講を修す
[illegible]比良八講と称し[illegible]上 引鶴 引鴨。
光嵐海十四、引ハ帰る也 [illegible]
[illegible]ハ引くる[illegible]引[illegible]中[illegible]田[illegible]支度
十四日[illegible]ハ一重を以て[illegible]
故ニ[illegible]ハ一重のごとく 彼岸桜
小白軍[illegible]余の花ニ先ニ引[illegible]
[illegible]の俗正月用る処の餅花を彼岸ニ至て二月社[illegible]
[illegible]て供物[illegible]又穀のなく餅を煮て[illegible]涅槃の供物ニ

(も) 餅花煎 十五日

人　太切麥
冷麦　干瓜
奈良漬　薑　梅
梅干漬　納豆仕立
[illegible]造り　[illegible]
仲夏　鯰
掛麺おろし

神祇

冨士詣　愛染祭
六月會　祇園會
長刀鉾　月鉾　鯰鉾
葉武鉾　岩戸鉾　傘鉾

諸子魚（モロコ）　[illegible]
[illegible]川[illegible]
[illegible]
[illegible]

鰐淵	占出山	孟宗山 郭巨山
琴破山	太子山	白乗天山 猶桜山
木城前山	芦刈山	山伏山 保昌山
天神山		○以上七日
稽寺菩山	昌主山	洋妙山 鯉山
鈴鹿山	行者山	観音山 雪山
鰐鮮		○以上十四日
洋岳祭		芦の御輩
熱田祭		東京 山王祭
伊勢参礼		竹生島参
博多参		妙音講
相國寺懺法		座頭涼

後稲荷の神出現せ給ふ〻〻芝寺長者の家に萬年草と〻〻稲荷山〻〻寸今の旅所は芝寺の宅地に熟花の時神輩とし〻〻二十日是吉の送風に此神二の年の日中出二の所日選幸該世俗諸に〻〻中出〻〻中出〻〻中出

鞠 一名竹伐　上総波祭
座広祭　嚴島祭
愛宕千日詣　天満宮祭
稽立祭　幸神祭
南京陸詣　東京月詣
住吉詣　住吉火替
住吉おどり　結生祭
兎　乞　大祓
夏　たなばた　夕はらへ
たなばた祭　名越乃祓
ものいみ祭　みそぎの祓
南祓川　形代

る体ハ山里深山の人を絶て天地の間にあるがごとし
数ハ雲中一寺影をかくすがごとし又ハ一ツの孤花数
ゑぎりあるを感ずるを又花月にしていまだ
なし春の夢の覚ぬ間に通ず黄色二人前さ刷ふ

馬藺花 【種類通経】葉蘭に似て長く厚し三月
葉間に赤き花を開く五月実を結ぶ角子を
こしらへ

鎮祭 【公事根源】是ハ大神荒井の二祭
【神祇令】三月

角子草 【救荒本草】山茶
科 俗のうるさい四
五尺枝梗ハ白色裙の葉に似て四ツ葉二ツ
撰り出て毛ありて細く密なり嫩葉を茹て乾し
葉として飲料とす

八十八夜 立春の日より八十
八夜に当る

春の湊 妻の物と思ふ心ハ一ツ
ゑぎりあるを行妻の
ゑぎりあるを行妻に
ゑぎりあるを行の

令法 【救荒本草】山茶
科 俗のうるさい四

木瓜花 【和漢三才図会】世に木瓜
と称するこの本草の

蓮

は

著の梅　梅雨の祓
ものいみ　麻の祭流し
小暑　神　夏神楽

公事故実

醴　佐　忌日御飯
神今食　内侍所卜
鮮魚内粥　節折
雷鳴の陣　施米

○七月之部

乾坤

初秋　早秋
残暑　秋の初風

註ニ云ハ是本瓜ハ瓜ニ似ず近頃唐ノ木瓜ノ
出るものあり人ゑを書キ乃ちこの木瓜ノ
妻の赤花牙〻
陳紅色ノ
葉長さ一二尺ニ
厚くこいく緑色あり冬中萌を起し三月ニ至
一花五出青黄色形ちゑ蓮華花ニ似て
居しく香気あり是蘭譜ニ出る独頭花なり

郭公の巣 【和漢三才図会】杜鵑ハ巣を営むこと
ハ巣の古巣を覆て是を借
【説文】杜鵑蜀王望帝所化也
て卵をはぐ
至テ今寄レ巣ニ生子百鳥為哺其雛尚如君臣

喜蘭花 【花彙】山中ニ多く
生ス一根叢生す

桃花の節 【月令廣義】唐徳宗以上巳
後今是桃花節也

鶏合 【列子】【左傳】【草文類
聚】あるいハ
闘鶏ハ周の世ニ始て起る
【紀事】禁裡清涼殿南階の花
闘鶏ハ周の世ニ始て起る
孫市ハ
ニ頭を勝負を定ム又行司と称

土佐海硯石取 【雑談抄】三毛吹草ニ三月三日
土佐國西寺のゑさきの硯

初嵐	初あらし	
秋やすか	律のさゝへ	
新涼	初てすゞし	
稲妻	初月	
花火	七日節句	
七夕	たなばた	
織女	牽牛	
星合	二星	
天の川	銀河 金河	
彦星	星の手向 星の契	
星ぬすむ	たなばつ姫 たなばた姫	
糸織姫	糸の木姫 機の葉姫	
薫姫		
百子姫		

より硯石を取出すこと侍るを例年の時刻に変じ西寺の僧侶上に刻を經を讀誦するを例とす

領主の采地とまりて禄を石を取こと例年今世も禄を取あり

寿の巣 寿の巣 ハ樹上ニ

虎尾櫻 此樹の影必も枝條屈蟠して組合せ巣をつくる

花の蕊を摘すゝ虎尾のごとく枝上に花と蕊を取故に尾の尾と云

ち

重三 五月五日を重五九月九日重九と云 三月三日を重三と云 重三と云

長春 月季花也

夷人家に多く栽る薔薇の類形小青き莖葉きき夢便き刺あり陰紅千葉月を逐ひて開放し実を結ぶ

丁子草 大和本草 蕊ハ柳に似て中の蕊白く花も丁子に似て

茶摘 編頌圖經 茶ハ春中採て嫩葉を生ず蕊活て苦きあり之を去り是

茶 本朝食鑑 凡茶を採の後ハ八十八夜を過て採の茶肆馬蹄氏を求て飲む

り

鏤人 唐の時三月に鏤人蒸餅と云有日始て茶を採を始る云 三月朔日

た

御身拭 山城名所寺の名菩提寺

わ

若蔣 本草綱目 蔣ハ池沢の中に

忘霜 此時

か

寒食 荆楚歳時記 去冬至一百五日有疾風甚雨謂之寒食 周礼 疾氏

林檎花 宋馬志閑水岬 林檎 花葉似て三月形

錦人ハ我邦ニ云 錦人形の類あり

紅葉を採て子も赤の如し

佛五尺貳分の立像ニ天竺畏音羅広赤梅檀を以て作る所ニ今日寺僧白木を以て佛像を拭ひ拂ふ拭と云 三月十九日

ヰもそ二三月白き芽を生ず筍の如

是茲荀 茎白茲菜也是を若蔣と云

農民種を撒の節と云 立春より八十八夜のところ必霜あり 流水の花房 嫩葉こゝにあり時を多く

拾る故に此節後 簀を掩ひ此葉の氣を防く 字治茶園の如き時を畏る 別霜と云

仲春禁火千國中 季春將出火 冬採 介子綏五月五日を以て死も文公哀民を以て挙ざるゆ

今の人冬至より一百五日を寒食と年廿説已に互に異なり 五雜組 鄭中記に并州介子推が焼死を

七月 乾坤 三月 をわか

七夕鞠

初秋や たなばたの 帆屋の表着

文月や一人ぼしき女の子 丈山

七夜まや 天の川 嵐雪

彩の稿や 嵐雪 乙由

明かるく

かつらをぬけ 初風

初歯や秋の風

星合や歌を詠して 山陣

敷屋に入る

天の川 銀漢 星河 士朝 九董 若翠

櫂の葉さくり除や女文字 星の表も浮世の鐘と聞くなり

めらに貴く浮けり 月西 立琴 末て松風の志ゝく戎 遊院

別堤 星 星八 雲の奥 中禁 文月 秋たつや 白路 釜の蓋へ 白路

秋の水 声 秋 初秋や 戸明て 風 左 糸口の つひて 新 秋 文海 丁侯

秋さる 秋さる夜 男たち 女七夕

とも〜つぼ 頼ひの糸

七日 洗濯 法師むく毋 天の名 七種の

雑の庭 庭の立琴 れ

七夕 鞠 中元 十五日 生身魂 盆のつと入

踊 扇置 団扇 二百十日 相撲 龍田姫 露

きりの雨 雨のすかき 雨の玉 雨の袖 雨の海 雨の底

川 雨 きりの雨

四季俳諧戒時記前集

七月 乾坤植物 三月 かよ

と三日漢書の周挙の傳に太原介子推が髮を焼を以て母を養ひ中一月寒食中百有五日皆火を絶て冷食を以て寒食と唐の時に至て遂に普天皆然て民間禁を犯すに至りて魏武帝の時太原上黨を至の後

鄭羽を以て排て中に入る焦るものは輙死を論ず是何等の刑法ぞや国紀を禁ずるとは其見卓矣

● 寒の粥 玉燭宝典 寒食に大麦粥をつくり杏仁を研きて酪とし餳を以て是に沃く ● 寒の粥 事文類聚 寒食に麺を以て餅様をつくり寒をまろめ赤餳につけて寒餳と称す粥ならくい寒の粥

ハ寒餳 書云 洛陽に人家寒食に萬花輿を粧ひ楊花粥を

参る 玉燭宝典 居人寒食に遇へば楊花の粥を炊て飯を食へば陽気を

参る 道家 寒食に青精飯青飯と云 ● 桃花粥 貴く道家寒食に青精飯を食ふ 桃花粥を参る

金門歳節 寒食に茅花輿を粧ひ桃花粥を参る

樺桜 大和本草 かば桜 古今かばを桜と云ふ是也

海棠 海棠花

唐楊貴妃傳 明皇嘗て太真妃を召す妃酒を被て新に起く帝曰此乃ち海棠の睡未足耳、按ずるに花の名

柿の蓋 雑談抄

俗に柿の葉を用て蓋と称す季吟の説山井に三

月に出る花開全く嫩葉を出て四季彩彩柿の蓋の

童の形ひとつ〜柿の葉の三月

なるを立て 鳳凰呂 形鳳の像を特小き木を〜〜

立て 鳳凰呂 形鳳の像を特小き木を〜〜

未る是も初の芽を海上さ

見て学

蠶 蠶飼、蠶棚、桑蠶、飼屋、

先代旧事記 蚕を養ふの法、養屋の

西北に おのく一の室を設け注連を張て常に蚕

神を祭る、蠶室に桑の大葉を陰干布干は見を

簾或て箱の中に敷め、ときを室の上に安き蘭

宝牒を出まて天〜に干ぬを取基の上に垂て蚕

神を産しむ者早て種を解く簾箱に納め老嫩

を以て鋪薦に宿し同く室を設て あり

和漢三才図会

七月 乾坤植物 三月 かよ

秋風　秋の宮
子秋水　新渋

植物類

梶の葉　梶の葉
芋の葉の葉　つゐもの芋
桐　一葉
一葉　桐の葉　桐の葉の葉
柳　枯れ　楓
青くて　木槿
柞　穂
楸　須さき
木瓜の実　梶の花

ほきさまを作らんとする時殷賑を用て物こまに九蚕已に生て稍長まるものこれを蚕又は箱に入れ並へ置て飼蚕ハ則蚕家を云

よ

蓬餅　木朝食鑑　蓬餅ハ嫩き艾苗を采り莖を去り搗て蒸し

吉野の會式　十一日　吉野院の

糯と合し搗て餅と作る時殷賑を用て物こまに作る三月上巳の変食也

寺説に云大和国吉野山子守勝手の両明神の神輿本来へ法師と三月花の頃彩色花會式と云

楊貴妃櫻　ヤウキヒサクラ　粤福寺の楊玉環が愛せしと名づけ一説に此花大福にして紅色を含む法師に似たり或き猿の面に似たり又ハ蛍、杜鵑、さ説なるべし　粤　或書に云唐玄宗呼子鳥と唐玄の中つゝ帯て愛ゝ島のとも也ゝ闘鶏曰呼子鳥ハ毒のまゝ呼子鳥ハ呼子鳥と呼ぶ故に号く呼子鳥と形ち鳩と似く春も初め頃白色にて後ち

呼子鳥　此鳥のとき古今集三月の一もとゝして詠出

寺説

すべて鷹の如き形ち小しく又曰かゝ鳥と云もまのもと今俗のかんこどりと云ハ鳴子鳥の字音よ

高雄法華會　安良比花。

高雄縁起　云三月十日法華会を人多く集りて高雄の法花會ヤスラハテヨと云ふ

百練抄　久壽二年四月廿日京中男女風流を備へ鼓笛を打ち鳴らし壁の社に奉る世に夜須礼と号す勅なり

紀事　今日中堂の花の神事上賀茂上て禁止ある

平野の土民烏帽子を着し或き異形の装を造

名吳口同音ゝ良比花と云ふ太鼓横笛ゝ節を助くゝ

雜談抄　この祭ハ嘉運ゝ奥州せし所あり

夫木　ゝ尾山のゝを形りなる

ゝ花と報ゝ川ゝ西行

竹秋　廣韻

園竹秋三月也蘭秋七月也

竹譜　八月爲春二三月爲秋云云

鷹の巣　和漢三才圖會　鷹巣を生ものハ好て眠ず未ず巣ゝ者ハ雙ゝ人家ゝ育ゝよりを巣ゝと云

つ

茅花　本草　白茅巣ハ茅のもし故ゝ巣ゝ茅ゝ云白き花咲く

躑

常山の花　栃
棗　葡萄
ちゝび　ちゝ
蘭　蓬
ふぢさう　ちゝぎ
秋海棠　蓼尾香
きちかう　桔梗
お秋ゝ　女郎花
芭蕉　蒲尾草
水うち芋　旋覆の花
萩　ほうの萩
ゝ萩　ゝ萩のすき

部類 伊勢崎時記新草

翁草
親草 菜の芽
おとぎり草 五味子
仙翁花 紅梅草
顔 桐 やまとの花
鳳仙花 つばきの花
解語草 益母草
めさぎき草 曼殊沙花
きちかひ草 うちんの花
蓮の実 飛 夕貞の実
青 酸 栗の蘂

躑躅 千金翼方 羊踟躕花を生ずる故に羊躑躅と云ふ一説に羊の性至孝にして此花の赤き蕚を食ふ故に羊躑躅と云ふ ●山つゝじ。きゝきゝの四五尺位きゝの一二尺枝おく花繁し一枝数蕚、三月始く花開く、又紅あり蕚あり五出ありて千葉なり一名紅躑躅、又山石榴、又映山紅、又杜鵑花 ●白躑躅 一名白羊躑躅 ●羊躑躅、韓保昇曰小樹なり二尺葉は桃の如く似て花紫也瓜の如くなり 和名抄 羊つゝじ以波豆々之 ●蓮花つゝじ、遠く望は蓮の如し 出毛知豆々之 ●蓮花つゝじ、蓮花つゝじ訓は躑躅 躑躅物の説あり倭俗別種なり ●浅葱つゝじ、 大和本草 葉は大麥葱の如く枝蔓の如し小木にして花も稀花似て小さく色は葱に似たり大山の岩上に多し 同上 紫花東笑草の つゝじ一丈許り常のつゝじの三倍大きなり花なるいしい葉三角なり野中日光山中に多し土人是をやシホと云白花のものを白やシホと云 ●姫つゝじ。洛外山中に多し花紫色少稀なり ●瑞花つゝじ。紫の花

星草
蓖麻子 いなむしの雲
稲葉
豆のはなせ 稲の花
富士の花 水芭蕉
早田の稲葉 早稲
隱元豆 ちゝ豆
陰 瓜 西瓜
げんふうかうか 南瓜
陸 蒸 陸稲
菰 菜 蔓
萩の上風 芒

四季 播磨 常陸 肥前 出羽 陸奥 信濃 伊勢 尾張 武蔵 相模 駿河 遠江 甲斐 上野 下野 安房 上総 下総 陸奥 出羽 佐渡 越後 越中 加賀 能登 丹後 但馬 因幡 伯耆 出雲 石見 隠岐 備前 備中 備後 安芸 周防 長門 紀伊 和泉 淡路 阿波 讃岐 伊予 土佐 筑前 筑後 肥後 日向 薩摩 壱岐 対馬

山もゝの枝に連り咲くなり蕚色づく ●平戸つゝじ、琉球つゝじ云平戸は大名の地名 ●踏枝より出つゝ四月花咲く、単白二重大なる者一二段つゝじ、段々地名の上賀茂の南の山に壇に所なるを赤紫藤蓮花の四種咲連り段壇両字共に書 ●紅色なるつゝじ。白紫の数名ありて元文隅國嘉島山より出せり

躑躅衣 挑花御記 面白芳裏青打 合記 躑躅下重両蕪芳裡紅打三月

な

棗の花 大和本草 芽茅を出す故に名つめ出る花蕚花四五月咲きて

梨の花 三月白花咲く書しし云出る能上已秋実を結ぶ俗語活法の書に二月に出るは誤れ長保あるきは実生之云 ●素梨 此梨も出羽の山林に ●芽生の浦梨、伊勢の国芽生の浦の梨の名所なり

奈良櫻 陸奥集 奈良の都の八重櫻ときこえたる 寺の別当に仰せくかの櫻をめしくだされ 上東門院奥福 打ぶめき女院きこしめして奈良法師はなきものと思ひなきものと思ひ 上東門院に真つゝ

部類 仲諸歳時記新季節

鬼灯 一名酸漿 唐の羽すゝき

茅の花 千種の花 百草の花

ちのこぶ草

弁芝草 小かや 茅草 萱草

かやうつり草 かや苅 かやふく

若萱 犬子草

絲萱 絲の萱草 牛房引

けしうど

糸瓜 冬瓜

苧 紫苧

我樣と名付んとて伊勢國金蔵と庄を もくく花垣の庄と号してかさねせる也 おもみ

藝文類聚 云草耳は子熟青白く白花細莖蔓 草耳。 蒸。 はじめ四月子を結ぶ云 蒸後茶 めもくもくと苦有

台記 後一条院の御宇万寿二年大宮御願の託宣さまゝて叡山大宮の宝前にて法花八講を修す其後毎年三月十三の両日行之

麥鶉 本朝食鑑 三四月田麦長き時花をさくものを穿て麦鶉と号す

禮拜講 木母寺大念佛會、武藏國葛飾郡隅田川、梅柳山隅田院木母寺の縁起に云往昔吉田少將惟房卿の男七歳の子父を尋ねおれ愁傷のあまり遂に有馬の門に入りもとゆ移ぶれ叡山月林寺に登りて修学ひ十二業にして無人の為にあぶ東海の旅に赴き病にかゝりて終に真元元年丙子三月十五日遷化の作業をなし常行念佛を修せられしものかゝ

小芋 芋 芋 芋

著 軍 芋

山かぢ 蘇 芋

吉 薯 薯の象 薯うら

野辺さつま 薯

生類

鶯の子 子 出 鶯の山別 鶯の山ゐり

初鷹 初鷹 初鷹 初鷹 初鷹 初鷹

初魚 初魚 初魚 初魚 初魚 初魚

むしの音 むしの声 むし合 歌

四季 年諸歳時記 四季 年諸歳時記

今こゝ大念仏會のより建立に任せ塚を築柳を植今日桑村人雑集も 萍生初ル 月令 曰、萍始生穀雨之節氣候也

鶉の巣 鶉は性愚にして淺草に窠伏す常居おくして草匹者を地に隨る安んも巣を営む雀の巣に似て粗あらず

鬪會 魚梁は竹簀を左右に立上廣く下狹くして空口を魚梁の口をうるもの即ち筌に魚簗を作る入又簀と二別に簿を曲々竜の如くして底あく縄を結て底に也 魚梁の如くして魚入る紀に順ずして障あり鳥の道に

入る鳥 朗詠 花蔭陸地を入雲、乃ち像に雲を入て雲を花の陰に入る也 勸学會 朗詠注 真林寺月輪院に行人あり天台の大衆法華を誦す紀典の儒も詩聯句を成す康保年中に大内記保胤在吉綺貴の罪を亡ぎんとて文道先達学徒をすめて三月九月の十善に行ひ三条の北今の資の交に跡なる 九輪草 救荒本草

松むし　人まつむし
鈴虫　鳴虫
馬追虫　はりくき
竈馬　つきせつ鳴
蟋蟀　伊賀
はたおり　織
稲むし　蜻蛉
やんま　蜻蛉　赤蜻蛉　紅蜻蛉　蜻蛉
蟷螂　いが
秋蟬　つくつくし　来し蟬
蜩　我つち鳴
蓼くう虫　みの虫鳴

抽てゝ小花咲く樣草の花に似たり　蓼の末に五月九日の形ちなり　製用あり

や

柳の鬘

酉陽雜俎　唐制三月三日侍臣細柳園を揚て是を帯る

草餅

母子草を搗て餅とする道餅　蓬蒿を搗て是を帯る

養毒を免る云々　あの故に柳鬘をつくる事なり　●

折太刀、是を引て児童折ひとまるもの　ヤヘ

八重桜

冠花集　以ての外多く良社都の八重桜　伊勢大輔　此歌

多くは九重にあるべきものなり　後撰集

八重桜　花は三月の形ちなり　此歌世に多くあり

大和本草　樣葉は園史及び允恭花譜に其形狀詳なり　ヤマブキ

類ひなき山吹なり　酸漿ハコヤナギ　詳に記すべし　数冬酸漿美

山吹

楓花雜說　面白　折蒸美冬

山吹衣

本朝食鑑　樹高丈餘葉如端香水楊而細厚深

三月に美しく着之　又花山吹に似たり

楊梅花

青経冬不凋二月開花三月四月結実

薬師寺最勝會

七日十三日に行る七日の法会は薬師寺は大和国高市郡にあり天武九年十月創立持統文武の二帝祝

父ちゝ　父ちゝ

蛭蚓鳴

秋の蝶

之なしの虫

田の雪送る　小雀

柳鶯

和漢三才圖会　鶯　詳処に河鹿の中に多し　狀に似て白色淡黒

若雀

兄鶏

鶯

小隼

雀

撫鷹

青鷹

網掛鷹

鶉

鷹打

鳩吹

鶉

うづら　鶉　うづら　網

うは毛に　おぼ　鳴

川原毛式　百羽かき

鳴

片うづら　うづらの床

て壯觀とする馬琴が野辺の菓は寺と但しとは誤あり

弥生山

貞徳曰、弥生山、名所なり

只春の山とふしとあり

略考色を帯ぶ性好て群集し水上に浮ぶ性愛を嗜む故に面人馬の尾鬣の鬣を以て縄の頭を掛しこれを弱

柳鶯

和漢三才圖会　鶯　詳処に河鹿の中に多し　狀に似て白色淡黒

鶯

打

鳩吹

鶉

け

五形

漢名碎米薺、俗云五形、又蓮花草　和漢三才圖會　春苗を生ずる十葉皂莢及ひ槐の若葉に似たり両々相對し枝莖地に布て蔓乃如し節の上に莖を抽んて頂に花咲く三月より四月の

華鬘草

和漢三才圖會　花鬘草、葉に似たり尺餘葉に似たり長く花鬘を多く形ちに似たり　三月莖端に花咲

ふ

普賢象櫻

略の刈かき

稲のすやけたる
稲の茅を記

小男鹿 書元森

すがるかせき

鰹

江鮒

鱠

すゝ糸釣

鮎 梁

辛むし

百舌鳥

鹿

森笛 ちゝ垣

もみぢ葉錦 鳥

川ちゝ記

にぎたし陽走て

沙魚

小鰯

九万足

鰻 梁

楽山子

沖 兵

横川詩序 普賢堂ハ天下ヲ一世ヲ傳ル鎌倉ヲ堂ヲ安ヲ地ヲ樹ル俗ヲ普賢堂ヲ云 或ヲ普賢象ヲ云和訓鼻ヲ花ヲ音同〳〵 花白く旦夕ヲ菩薩乘ル処の白象の鼻の如しと両説何れか是ヲ定ル

藤 フジ

大和本草 花春の末ヲ四月ニ咲ル、花の色三尺ニ先ヲ花穂ニ挿ニ酒ヲ和ス甚ハ久しく養すれ木州ニ敗酒ヲ用ヲ色ハ正しと、相豆駿ニ多し ● 藤波。 蒙求 波ヲ似ル三苗波ヲ名ル

(二) 幸夷 フジ 格物論一名

江つゝもたもつる ● 下ヲ藤、松むしの樹ヲ咲ル

候挑、木筆、二月花ヲ先く開て実ヲし一説ニ樹の多ニ似く蕾の苞白猫あり又白花のものあり小鞠の如し

故ニ鞠ヲ名ぶしとゝ蕾のもの木蓮に似くり香氣菖のごく蘭ニ近し

稲花 コバノハナ 和漢

三才会 稲米ハ小樹叢生ス高さ三四尺葉狹く長く立菊ヲ二三月白花年く大サ綿ヲ蕾ヲ

稲の如し俗呼て小米ヲ云

小粉団花 コリ

同上 木の高さ四五尺葉狹く山吹ニ似たり花形彩団の如く白し

金王桜 コンワウサクラ

一名蓑志稲ヲ云東京渡谷八幡の社地ヲ渡ル金王ヲ載ヲ云

高麗菊 志 妻菜の葉ニ出ル

(え) 江戸 エド

桜 サクラ

是樹ニ葉かゝ赤し花大輪にして莖長く下ニ垂ル

この経関東ニ多し 故ニ江戸桜ヲ云

● 右衛門の稲、東京四ツ谷柏木村延正寺美師堂の前ニ有ル昔武田右エ門ヲ云者此稲を愛せり尚所ハ柏木村ニて右エ門ヲ愛せし稲ヲ植ル後人源氏物語柏木の右エ門ニ倣て名ヲ付

化偷草 エビネ

和漢三才図会

今多く庭園ニ植ル其花を愛ス子も周ル葉ハ車前子ニ似て厚く長し地ニ布て生ス三四月莖を抽て花を生ス色紫ニ肉紅或ハ淡黄或ハ淡黄色ニ紫色ニ其根蝦ニ似たり

(て) 田鼠 デンソ

化鶉 ウツラ

月令 季春之月、田鼠化為鶉 術義 本草 鷃抑ヲ云ヲ短く進ル能ハ行ル

ヲ長寸許ヲ目極て小く項ハ短く居ル安し或ハ竹ヲ道く射ル鷹ヲ飼ハ夏小正三月田鼠化して鶉ヲ

八月駕化して田鼠ヲ為ル

(あ) 浅葱桜 アサキ サクラ

大輪にして八重ニ色ハ淡青白色を含ム他の桜ニ異ニ色多し

踏青 フム アヲキ

章下歳時記 唐人上巳曲江頭 都城紀略 三月三日山野ニ出

島ハ登之 麻ハ世志 山ハ原ヲ呼 竹ハ子之 図

稲ヲ刈や 鶴を振ル 葉の中 其角

丹ハ水ヲ名の下や むしの名注 稲ヲ 丈芋

蓮田ハ月稲 かゝ月豆の 日和ヲ郎 二秀

水蓼 細蓼 蓼酢 蓼の花 蓼の実 蓼の穂 蓼の雨 蓼の露 蓼の月 蓼の風 蓼の蔭 蓼の水 蓼の池 蓼の中 蓼の家 蓼の宿 蓼の庵 蓼の里 蓼の山 蓼の原 蓼の野 蓼の道 蓼の門 蓼の戸 蓼の窓 蓼の垣 蓼の柴 蓼の柴垣 蓼の柴戸 蓼の柴屋 蓼の柴舟 蓼の柴笛 蓼の柴刈 蓼の柴山 蓼の柴原 蓼の柴道 蓼の柴門 蓼の柴戸 蓼の柴垣

池坊立花之圖

本願寺立花　同炮花
文殊會　六道參
迎鐘　法ろう
施餓鬼　清水千日詣
門茶　三皿蘭盆
盆會　盆供

き中華に有紀し延宝年中長崎に来りし何清甫
いく、朝鮮にも有とか、●八重櫨、宗良し、普賢象
楊貴妃、江戸し、虎尾、樣、犬、蛾眉、等の櫨名頭字
の部に在り●吉野茅、仇名茅、孝兄茅、竹千本の茅
かざし茅、以上櫨の異名に●南殿の櫨、法近の櫨
禁裏殿の巽角に有本い梅もりしを後枯失
【歴代編年集成】●鞠るの雲珠櫨、重鞠の雲珠に似るを櫨と
●塩竈櫨、紫の重て鞠色あり生枝葉こと江うるい
●縄さくら、小櫨として莖長くなき蒼玉赤し●櫨
【連歌新式抄】除馬さくらのことを云二国のいはおくも一本
田、連歌
おどい生世如もこのとくく多くなること●櫨戸、
【哥林良材】櫨の木くく造りする戸に松の戸、揖の戸、のごとし
一説に戸の近辺に櫨の咲なるを云只櫨の有るまりの宿あり
●櫻狩、【奥儀抄】櫨を尋ぬるを云何を求るも狩
又草狩なきを云同し●櫨人、櫨の
なりこと有人を云又
催馬乗の呂歌に云
の一種天稚なり葉の色相似く微小三四月莖を抽
んで花を生じ茅の如く然て白花櫨の花のごとく最美之

櫨草

【和漢三才図会】山谷乃中に生じ即九櫨草

魂祭　亜吳祭
かるの桐　柳經　みたはぎ　蓮の塔
ちの果　枝まめ　枯さくけ　ちりの実
根芋　ちもも　書瓜　まそは
青柿　素麺　掛そうめん　麻から著
迎火　送火　盆
墓　糸　反書納め
内裏内侍篭　揚燈籠
うま　燈籠　彩の灯籠　きりま
まりま　燈籠
三井寺女詣　安居頭　燈广糸
大文字火　妙法の火

櫻鯛

【本朝食鑑】弟書に云春三月櫻花さきて魚人
多くこれを捕る故櫻鯛と云京阪の人俗に魚
生産に云此所朝多くこれを出●櫻魚、常のさく
此国の名産にて川、鱞
裏岐多くこれを川、鱞

櫻子

【子櫻】さくらかい　正字未詳賊の字を用
小果多り俗字に云ぞ此魚所々有先江湖に多し其六寸
くらい大なるもの七八寸皆黑く背赤し信州諏訪の
湖水にくく赤魚と云の箱根湖にくく赤魚と云也巡
りて裏花咲くこれを櫻子と云

櫻衣

【道遥院日抄】面白裏青、冥白大臣等春着之
【嬉遊笑覧】面白堂裏葡萄漆、又面白裏赤

三月大根

【江陵隨志】蘆菔一種暮春の時有之
名つけて櫻色大根と云一説に裏に至て
苦辛多し

櫻大念佛

【紀事】九日十五日

三月盡　三月の三十日を云裏の果裏の根なるもいろ

曲水

活字大文字
送火之圖

宴 流觴。巴字盞。 荆楚歳時記 三月三日四民水浴盞ひて流觴曲水の飲を為す。

公事根源 むかし王卿あつまり参りて酒をくみ詩を作る講巳日後苑に流水あり盞をうかべて文人以下これをのむ東保の説記のまを見たり又雄略天皇元年三月なかれてめぐり水のごとくなるを字に似たりと日本紀にあり 拾遺抄 曲水の地智は巴の此會周の世の前より始まる久く絶たるを魏文帝又奥して宴を設て善悪遠近をうりて臣下に似たる貝あり芝を敷て餐を案ず 経供養 拾遺抄四天王寺太子堂の北隅まり水を如意輪観音の飛鳥の用山此盞すく水を汲みとれり 三月二日経供養を修す太子夢殿の経供養是なり

金鳳花 一名毛茛、又鬼の田芹子、春苗を生ずるさきの又余一枝三葉、葉に三尖及び三鉄ありて四五月小黄花をひらく五出玉光艶あり実を結ぶ形鳳に似たる春来の根株ひくして失なり 文和本草 石竜芮に似て毛ありて光なし花黄にして春芽二月葉にも美 河巻の花に似たりて毒草なり

金盞 金盞艸、一名長春花、金盞花の形を云長春花とは久しきに耐ることを云黄金色の花盞に似たり

菊 月令廣義 菊花、穀雨の時根を培起し壮嫩なる剖棟の根ならべの芽を種べ発白

裁替 月令廣義 菊花、穀雨の時根を培起し壮嫩なる剖棟の根ならべの芽を種べ発白

油花の 図經 洛陽上巳の日婦女菊の花を以て油を点じ鬢花を水上に洒ぐ若童鳴花弁の形を為すとさ古花蔕ならべ温泥を裹つけ蒸して於

ト 図經 洛陽上巳の日婦女菊の花を以て油を点じ鬢花を水上に洒ぐ若童鳴花弁の形を為すとさ古

楊梅花 花彙 八閩通志に云楊梅の木大きもの是に近し一名花咲白色て

巳日祓 韓林 外傳 三月桃花水の時、鄭国之俗、三月上巳、於溱洧両水之上執蘭招魂續魂祓除不祥、水邪を早く此とかり 須

水尾祭 九日 神社啓蒙 水尾神社は丹波国桑田郡愛宕山の傍に有り 広の御祭 訪神一座 清和天皇

壬生念佛 雍州府志 心浄光院壬生にあり故に壬生寺と云又寛慥

鳥居火 舟の出 乗物会 清水流 岩倉燈籠踊 長谷燈籠踊 松ヶ崎灯籠踊 西賀茂出 文覚忌 地蔵會 六斎念仏 阿弥陀山祭 遊家作 迎の峯入

公事故実

相撲使 撰の祭りくさく

○八月之部

乾坤

八月

八月	田面祝	田の実いさんなのむ日	繪行器
後の岑代	竹喜		
長夜	夜寒		
豹変	秋きむ		
そぞろ寒	うそ寒		
淋さ	冷〻		
暴風	水祓ひ		
雷声収む	秋夕	秋の夕べ 秋の夕べ	
初汐	良夜		月見

寺〻云中世三井に属せ故に小三井寺と字せ本尊地蔵菩薩の像なり鑑真の像なり真言宗南都の招提寺に属せ傍に鑑真の像なり中興を一條院正暦年中円覚上人此寺に住し始めて念仏を修せ今に絶ず毎三月二十日間此法行なり

人僧侶を寺に出すことを壬生狂言と云一説通念仏の踊なるべし 雑談抄 この狂言に用る仮面仏工定朝が作

御影供 弘法大師の御新供なり毎年三月廿一日入定今に至る

上巳 紀事 今日を俗郎白と称す年中五節句に一貫の上巳初の巳の日を上巳と云三月辰二面有り云ふ

紀事 今日三月三日の節句なり此日人形を作り川に流す人形を撫て身の穢を祓ふ 東寺辯事

鞦韆の戯 曙素。ゆきばす。ぶらこ。

荆楚歳時記 春の節長き縄を高木に掛け士女裙服を上に垂れ立て出て遊戯を競引き高く秋千に乗る俗是を施鞦と楚人呼て是を曙素と云但繫縛されを曙素と云ふ秋千と云縄の戯に今を字書に考るに秋千と云縄の戯に今を字華不従ふ実に今ぞ當て華を用ひべき

汐干 紀事 三月三日海潮大に乾く泉州堺の海辺に出て遊ぶ

人焚び住吉の祭に紀為加田武為品川に祭る

修學

寺祭 五日 紀事 元此寺に七郷皆祭有り神一説寺の八大天王に同じ又一説に赤山明神也

順の峯入 雜則府志 往昔役の行者入峯の道を求て奉安の経塚より葛城大峯入る吉野に出是を順の峯入と云 赤後大峯より出て踏を擁て峯に依て入峯之しく経西塔の醍醐寺岡山聖宝自ら斧鉞を執て吉野山より大峯山の後に入て蛇の尾を斬て遂に熊野に出る是を逆の峯入と云○東の峯入を順と云 水山方是を動む三宝院門室に於て是を行なり 東僧誓俊山中の峯入を逆と云 当山方是を動む三宝院門室に於て是を行なり

石楠花 去年の古葉を脱て新葉を出す故に石南と名づく 本草 石間陽 向陽の所に生ず故に石南と名づく

花彙 処〻に深山中に有之諸国大和金剛山に多し樹大なるもの丈高く枝條柔軟にして葉小蕾茶褐色にして厚く長し面深緑裏に毛茸ありて茶褐色なり四月枝梢に花を開く数十集り生ず形紅色蕾

[illegible] 越人 杉風 木撥の葉槻に似て長く摘きいたして撥に[illegible]

芋を拳に鵜のうち迄月夜哉 許六

舟賀の道かさなりて月見る郎 丈芝

○

仲秋の魂まつる芋名今日の月 其村

宿るときは又も野に出の月 沾酔

月見とて坊い縁るゝ小格子 士朗

峯なけい源石と見て面の月 黄机

名月の初花ゆる二日月 岳船

[illegible] 高麗菊

[illegible]

花

和漢三才圖會 端香、信濃沉丁花、桜、瑞香、[illegible]

ハ此山樊の類ニもまれに出沉丁花ニ[illegible]

子云出形ニ園ニ花ニ似て

大サ寸餘頃ニ葉觀ニ[illegible]

櫥の花

和漢三才圖會

枝幹[illegible]として葉ハ黄ニ[illegible]

春花を著く丁香の如くして此ニ色[illegible]

外淡紫内白く十余朶横簇[illegible]

[illegible]

沉丁

喜葉

和漢三才圖會 俗云[illegible]

[illegible]

秋色櫨

東京[illegible]の[illegible]

傳[illegible]一名大殺石櫨[illegible]小河町

[illegible]

[illegible]

菓子屋の娘[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雛

名月

[illegible]初月

[illegible]の月 [illegible]今宵

[illegible]月

新月 十五夜

芋名月 名[illegible]月

待宵月

[illegible]待て宵の[illegible]

小[illegible]月

宵ふ知月

十、六夜

月のうら[illegible]男

[illegible]の[illegible]

[illegible]月

[illegible]月の[illegible]

[illegible]月

[illegible]月の[illegible]

上弦

[illegible]の[illegible]月

[illegible]月の雪

[illegible]月の霜

下弦

[illegible]月の[illegible]

月待

立待

十七夜

祭

雜遊、雜飾。

紀事 三月三日良賤の男女紙人

立雛 紙雛。偶を製し是を雛祭と称し[illegible]物

[illegible]元贈物の義にして[illegible]

[illegible]三日[illegible]

[illegible]物の人形[illegible]

祭

十五日。江州[illegible]良村の[illegible]神輿ニ基山王十禅神ハ

[illegible]天神の両社二十禅[illegible]

天神ハ北比良村の[illegible]

金町を[illegible]

[illegible]

人丸祭

十八日○古へ官家[illegible]

歌會を[illegible]

近所ニ[illegible]

寺ニ人丸堂あり木像ハ傳人丸[illegible]

又播州明石ニも人丸の所縁[illegible]

[illegible]世ニ[illegible]

沙良

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

居待 十八夜　伏待 十九夜
更待 廿日　廿日亥中　亥中月
北三夜月　玉兎　半裁　嫦娥　金波　水輪　氷鏡　玄兎　銀盤
星月夜

植物類

八朔梅　初もぎ　ぎ
名の木菱　梅　もどき
木犀花　桂乃花
漆の花　銀杏
ざくろ　葡萄　榎

霊元帝の御宇及て勅ありて終る迄奥し廃たる式挙く従一位の賜ありけるとぞ

桃花（モモノハナ）

車類賦 其花或ハ仙人壽を益し或ハ鬼を制して邪を祛ふ或ハ后妃の徳をあらはす或ハ瓊瑤の華に報じ○或書に伊弉諾尊桃子三箇を採て大警女を擊、悪卒皆去依て桃を祭る 大和本草 松江府志に桃花千葉を称して江戸桃、三名一種漢名を金銀桃と云八重にして也紅白く或ハ紅色にして花八重に咲て大きく頗美 ● 油桃、花葉の桃ちふさ 和名都波岐毛ゝ ● 三千世草、桃の異名 ● 西王母、桃の一種 ● 源平桃、日月毒 ● 御酒古草 蔡伯喈 桃の異名 ● 桃酒 桃の花を漬して色を飲 ● 桃の花を井に入る井沼に入る桃の花 ● 桃の花を三年米に入る年色を以て物を浸し破しまを飲めば太平 ● 桃の花を井に入る井沼に入る桃の花 ● 桃の花を三年米に入る年色を以て物を浸し破しまを飲めば太平

芙蓉　木ふよう　芙蓉
牡丹根分　芍薬根分
益の花　山ちしの実
敗荷　巻むくさ
紫菀　鬼のまと草
花野　宇治の花園
鶏頭　紅　水引の実
むくろじの花　檀特の花
雲草　青花
金剛草　青つゆ草
烏瓜　さねかづらの実
二七の花　雀　麦

木蓮（モクレン）花

大和本草 國俗蓮の木蓮花と云花の色悪し白きを白木蓮と云色を

忌（キ）

洛の東山ちかく中興第山 薬師寺忌を修する釈書に云 薬師寺ハ不可棄恥の後洲鮑郡の人母ハ茂氏生て数日樹下に棄つ三日を経て禽獸の害なし阿妹往て見て哀れむる祥児を抱き帰て母に養育す十八にして落飾 遂に二年四月入宋五月の初宋の江陰軍に着す建炎改元 十帰朝嘉禄元年十月泉涌寺に重害譚坐を建り長仕 英華講 右脇して臥す年六十二云 法會八日 又八九日修之

泉涌寺開山（センユウジカイサン）

十四〇唐の終南山悟真光明善寺大師の忌日に唐高宗 永隆二年三月廿四日迂化す本邦東山禅林寺に永観堂知恩院 小松谷百万遍の寺院 此忌修

千本念佛（センボンネンブツ）

朱雀通の北限引接寺簡魔堂に 紀事 昔も勤通念佛の会流に安年堂の普賢像 稱寺に丹くを以て寺僧一枝を折て諸司代に献す則ち 永三石ム十を賜ふ以之七日念佛の料とす一説此法事ハ元刑人の為に修す故に諸司代に施米有是追薦

梅の花　黄けんこう
鳳来紅　葉鶯
花すゝき　尾花
薄の穂　まそかの薄
木綿花　かうぞ
芋　藤　陰ゆふの花
芦の花　かしの穂
浮桔梗　ふかみ草
竜膽　山すゝき　ちゆゑ草
鶏草　藥堀
昔参引　たうやく引

の海ニ〇岡基定覚上人種の話に那波師たり

仙壺萩　千梅ハ花ハ

花ちるして豆の花の如く葉ハ世ちるに似て葉ニ

物語須广巻　中ゆのつかたそ巳の日出原氏須广、左近の時、三月の朔日巳の日ニて留四ニく舟ニ人形を立ゆ

須广の御稜　源氏

稜の月ニ人形を流し稜除しゆ

李花　年物異名　三月巻咲ちるして五出白花

蘇枋の花　和漢三才図会　稜ニ蘇枋の木ハ枝淡して白色葉落ち光あり莖長し三月花咲ハ大さ麦程斗ニ法

菫　菫草ハ野ニ生ず人の載ちるに似て三月紫色の花ちるく

壺菫ハ　花の形墨壺の如し故に墨入の意ニ名ク

三月之部

奮三月　姑洗律　清明節　穀雨中　季春、竹秋、病月、嘉月、弥生、稜月、稜月、卷見月、春惜月、

三月　啓蟄節　出雲祭一日、春季皇霊祭　春分中　字佐祭十日、春季神殿祭　十九日